

市内遺跡確認調査

かとうだひがしばるいせき
方保田東原遺跡

—— 個人住宅建設に伴う調査 ——

1992

山鹿市教育委員会

序 文

山鹿市には古くから人々が暮らしており、各時代に生きた人々の痕跡が遺跡として数多く残されています。歴史の流れのなかで私たちの命も受け継がれている事を認識しなければなりません。

郷土の歴史を解明することで当時の人々の知恵や工夫を学び、未来に何を伝えるかを考えるきっかけになります。文化財は郷土の誇りであり地域にとって人々の心の拠り所となっております。

方保田東原遺跡において個人住宅建設に伴って行った発掘調査の報告書ができましたのでお届けいたします。

発掘調査に際して、村上 工、小原孝徳、倉岡明美の各氏には多大のご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、本書が学術研究の一助となり、文化財保護の浸透につながれば幸いです。

平成4年3月

山鹿市教育長 北 井 澄 生

例 言

- 1 本書は山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は山鹿市大字方保田字東原に所在する方保田東原遺跡を対象とした。
- 3 調査は山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。
- 4 遺構の写真は高宮京子が撮影し、遺物は中村幸史郎が行った。
- 5 本書の執筆および編集は中村が行った。

本文目次

I	調査の経過	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	2
3	調査の組織	4
4	調査の目的	4
II	遺跡の環境	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	5
III	32-2番地の調査成果	11
1	調査の概要	11
2	遺構と遺物	11
(1)	1号住居跡	11
(2)	2号住居跡	12
(3)	3号住居跡	13
(4)	4号住居跡	15
(5)	5号住居跡	15
(6)	6号住居跡	16
(7)	7号住居跡	18
(8)	8号住居跡	18
(9)	1号土壌	19
(10)	2号土壌	20
(11)	3号土壌	20
(12)	1号溝	21
(13)	2号溝	22
(14)	3号溝	22
(15)	遺構に伴わない遺物	42
IV	116-4番地の調査成果	47
1	調査の概要	47
2	遺構と遺物	47
(1)	1号住居跡	47
(2)	2号住居跡	49

(3) 3号住居跡	50
(4) 4号住居跡	50
(5) 5号住居跡	51
(6) 遺構に伴わない遺物	52
V 116-5番地の調査成果	52
1 調査の概要	52
2 遺構と遺物	52
(1) 1号住居跡	52
(2) 堀立柱	52
(3) 遺構に伴わない遺物	55
VI まとめ	56

挿 図 目 次

第 1 図	方保田東原遺跡周辺遺跡分布図	6
第 2 図	方保田東原遺跡周辺地形図	8
第 3 図	方保田東原遺跡32-2番地調査区域測量図	9
第 4 図	32-2番地 遺構配置図	10
第 5 図	1号住居跡実測図	11
第 6 図	1号住居跡出土遺物実測図	12
第 7 図	2号住居跡実測図	12
第 8 図	2号住居跡出土遺物実測図	13
第 9 図	3号住居跡実測図	14
第10 図	3号住居跡出土遺物実測図	14
第11 図	4号住居跡実測図	15
第12 図	5号住居跡実測図	16
第13 図	5号住居跡出土遺物実測図	16
第14 図	6号住居跡実測図	17
第15 図	7号住居跡実測図	17
第16 図	7号住居跡出土遺物実測図	18

第 17 図	8 号住居跡実測図	18
第 18 図	8 号住居跡出土遺物実測図	19
第 19 図	1 号土壌実測図	19
第 20 図	1 号土壌出土遺物実測図	19
第 21 図	2 号土壌実測図	20
第 22 図	3 号土壌実測図	20
第 23 図	3 号土壌出土遺物実測図	20
第 24 図	1 号溝実測図	21
第 25 図	1 号溝出土遺物実測図	21
第 26 図	2 号溝実測図	23～24
第 27 図	2 号溝出土遺物実測図	23～24
第 28 図	3 号溝実測図	25～26
第 29 図	3 号溝(上層)出土遺物実測図	27
第 30 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	28
第 31 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	29
第 32 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	30
第 33 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	31
第 34 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	32
第 35 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	33
第 36 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	34
第 37 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	35
第 38 図	3 号溝(下層)出土遺物実測図	36
第 39 図	3 号溝(南断面)出土遺物実測図	37
第 40 図	3 号溝(南断面)出土遺物実測図	38
第 41 図	3 号溝(南断面)出土遺物実測図	39
第 42 図	遺構に伴わない遺物実測図	40
第 43 図	遺構に伴わない遺物実測図	41
第 44 図	遺構に伴わない遺物実測図	42
第 45 図	方保田東原遺跡116-4,5番地調査区域測量図	43～44
第 46 図	116-4番地 遺構配置図	45
第 47 図	1・2 号住居跡実測図	46
第 48 図	1 号住居跡出土遺物実測図	47
第 49 図	1 号住居跡出土遺物実測図	48

第 50 図	1 号住居跡出土遺物実測図	49
第 51 図	3 号住居跡実測図	49
第 52 図	3 号住居跡出土遺物実測図	50
第 53 図	4 号住居跡実測図	50
第 54 図	4 号住居跡出土遺物実測図	51
第 55 図	5 号住居跡実測図	51
第 56 図	遺構に伴わない遺物実測図	52
第 57 図	116-5 番地 遺構配置図	53~54
第 58 図	遺構に伴わない遺物実測図	55
第 59 図	遺構に伴わない遺物実測図	56

図 版 目 次

	32-2 番地	遺構写真
図版 1	1 1 号住居	図版 7 32-2 番地出土遺物
	2 4 号住居	8 32-2 番地出土遺物
	3 4 号住居	9 32-2 番地出土遺物
2	1 3 号住居	116-4~5 番地
	2 3 号住居 実測風景	
	3 1 号土壌 鉄鏝出土状況	
3	3 号溝	
4	3 号溝	
	116-4 番地	
5	1 1・2 号住居	
	2 1・2 号住居	
	3 2 号住居	
	116-5 番地	
6	1 1 号住居	
	2 柱穴群	
	3 集石遺構	

I 調査の経過

1 調査に至る経過

近年経済成長とともに開発事業や土地取引が頻繁に行なわれる様になってきた。山鹿市でも同様の現象が見られる様になって、宅地開発や工場増築といったミニ開発が相次いでいた。

遺跡の周辺に暮らしていることもあって、文化財に対する市民の認識が徐々に高まってきたようで、昨年から個人住宅の建設計画についても地権者からの事前協議が相次いで持ち込まれるようになったのである。山鹿市では文化財行政を博物館で実施しており、学芸員が埋蔵文化財調査員としての業務を行なっている状況で調査員不足が慢性化しているにもかかわらず、開発行為に対する行政指導とそれに伴う発掘調査は行なわなければならなかった。

国指定史跡方保田東原遺跡の周辺でも個人住宅建設の話が持ち上がり、地権者からの申し出で事前協議を行なっていたのである。今回の計画については、遺跡の重要性和、国指定区域に隣接しているところから試掘調査は実施せず、直接発掘調査を実施することを地権者に理解してもらった。このような経過から、調査費については個人自らの住宅を建設しようと計画していることから、原因者負担とすることに対しては地権者の負担が大きいものと判断された。したがって国庫補助（50％）と県費補助（9％）を得て市が実施することとなり、建設についてもそれまでの間は延期すると合意に達した。

地権者は3名で建設予定地も比較的隣接していたので順次調査を進める事として、平成3年8月から10月までの3ヶ月で3地点の調査を実施した。

各地点の所在地は熊本県山鹿市大字方保田東原32-2番地、116-4番地、116-5番地で、国指定史跡方保田東原遺跡の西側（32-2番地）と南側（116-4番地、116-5番地）に接しているところであった。（第2図）

なお、調査の範囲は建物を建てる区域に限って調査することとした。

2 調査の経過

平成3年

8月2日（金）晴れ

ようやく昨日特別展「ニュージーランドの化石展」をオープンさせたので、今日から調査準備のための作業を行う。発掘器材の点検整備及びユニットハウスを現場に設置

8月5日（月）くもりのち雨

市定期監査のため職員は博物館勤務にし、作業員による調査区域の設定を進めるが、雨のため午前中の作業とした。

8月6日（火）晴れ

32-2番地の調査区内に幅1.5m、長さ10mのトレンチをいれる。

8月7日（水）

トレンチ内より銅鏝1点出土する。

8月8日（木）晴れのちくもり

銅鏝の出土によりトレンチの拡大を決定し、ユンボによる排土作業を実施した。

8月9日（金）晴れ

116-5番地の表土剥ぎをユンボで行う。

8月19日（月）晴れ

中村は臨時議会出席のため現場を離れたので指示のみをして遺構検出を行った。

午後からは実測用杭打ちを行い4m四方になるよう設定した。

8月20日（火）晴れのちくもり

相変わらず日照りが続いており散水作業を行った。そのため土色の確認がし易くなった。台風12号の影響で風が強く雲の多い日であったので作業はやり易かった。

8月21日（水）くもり一時雨

遺構検出作業中銅鏝1点が出土したがジョレンで削り取ってしまって、幻の銅鏝となった。

8月25日（日）晴れ

116-5番地で一日発掘調査隊を行い発掘体験と32-2番地の見学会を行った。

8月30日（金）晴れ

中村は朝から教育委員会に出席した後、鹿本高校新規採用教職員研修指導のため午前中現場を離れたため山下、永田の2名に頼んだ。昨日、一昨日と雨のため現場を休んだので、朝から小雨が降っていたが作業を強行した。遺構検出がやりやすくなったおかげで2本の溝が確認された。

9月2日（月）晴れ

今日から116-4番地の遺構検出を並行して行う。

9月4日（水）くもりのち晴れ

32-2番地では遺物出土状況の実測作業を行い、116-4番地では遺構検出作業を行ったが、日照りが強く、共に散水作業を行った。

9月6日（金）晴れのちくもり

本日より116-5番地の調査も行う事とし合わせて3地区の作業となった。

9月11日（水）晴れ

32-2番地では1号溝の下に土器が集中して出土していたが、この部分は南北に伸びていく別の溝が存在するようである。116-4番地でも調査区北側の部分で遺物が集中して出土しており下から住居跡が出てきそうである。

9月18日（水）晴れ

32-2番地では3号溝を集中して掘り下げる。大量の土器は外来系甕が多く在地系甕は見られない。116-4番地では遺構検出を行うが明確なプランは見られない。

9月20日（金）晴れ

32-2番地では3号溝遺物出土状況の実測準備のため水系張りを午前中に行い、午後から実測に移った。数が多いのと密集して出土しているのとで作業が思うように進まない。

9月24日（火）小雨のちくもり

久々に雨が降ったお陰で土の色が見やすくなってきた。

10月2日（水）晴れ

32-2番地では3号溝遺物出土状況の実測がようやく終了し、明日以降取上げながら下の遺物の実測も行わなければならない。

10月16日（水）くもり

32-2番地の調査が本日ようやく終了した。3号溝から大量の土器が出土し、今後の作業が大変である。

10月18日（金）晴れ

本日から116-4番地の実測に集中することになった。

10月22日（火）晴れ

本日第1回の方保田東原遺跡整備基本計画策定委員会を開催した。委員の先生方には現場を見ていただき調査方法その他についてご指導頂いた。

10月28日（月）晴れ

本日で現場調査終了。

3 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

調査総括 北井 澄生（山鹿市教育長・山鹿市立博物館長）

調査団長 北井 澄生（ 〃 ）

調査事務 次木 万里子（山鹿市立博物館主任主事）

〃 大森 勲 （ 〃 ）

〃 山下 透 （ 〃 技師）

〃 永田 臣司（ 〃 主事）

調査担当 中村 幸史郎（ 〃 副館長）

作業員 前川誠一 野田辰起 高橋道昭 松本定 吉井新助 高橋信子 立山翠子
奥村千鶴子 福山千代美 飯田民子 飯田ツヤ子 若杉美也子 森崎節子
坂本喜久江 高宮京子 脇山智子 北原美和子

遺物整理 北原美和子 平尾淑子 高宮京子 城葉子 小原朱実 王丸ゆかり

調査協力 小原孝徳 村上工 倉岡明美

4 調査の目的

方保田東原遺跡は熊本県山鹿市大字方保田字東原を中心として広がる弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である。

遺跡自体の規模は不明であるが、遺構の密度と遺物量の多さは中九州でも最大級を誇り、巴形銅器をはじめとした青銅器の出土数も熊本県下最多の数を誇っている。しかし、遺跡周辺の開発も進み一部は宅地造成業者による大規模開発計画が持ち上がった。このことから関係各位の努力によって遺跡の一部約2.7haが昭和60年2月19日付けで国指定史跡となった。

国指定史跡になったものの、遺跡自体の広がりや指定区域内の遺構の状況は把握できていない状況であった。特に遺跡の西側に位置する大道小学校校庭遺跡と東側に位置する旧大道中学校校庭遺跡、さらに、南に位置する塚の本遺跡等とは明確な境界線は見出せないのが現状であった。

今回の調査は個人住宅建設に伴う事前調査で国指定区域の周辺部に当たり、指定地区外の遺構の状況と広がり、さらには密度の高さを確認することを目的とした。

Ⅱ 遺跡の環境

1 地理的環境

山鹿市は熊本県北部に位置した面積87.44km²、人口約34,000人の田園都市で古くから温泉地として賑わっている。

市内を西に流れる菊池川は、阿蘇外輪山西麓の菊池溪谷に源を発し全長61.2kmで菊池市、山鹿市、玉名市と流れ有明海に注いでいる。この川には65の支流が流れ込み総延長は326.96kmで球磨川、緑川とならんで熊本県下最大級の河川である。

山鹿市が位置する中流域では海拔20m程度で支流の多くが集まっており、熊本県北部で降った雨の殆どがこの地域に流れ込んでいる。加えて下流域との間には山間部が在り、毎年梅雨期には洪水が絶えなかった。そのため菊池市から山鹿市の間には東西15km 南北2kmの氾濫原が形成され「茂賀の浦三千町」として古くから重要な穀倉地帯になっている。

方保田東原遺跡はこの氾濫原を見下ろすように菊池川中流域の右岸に発達した標高35m～40mの河岸段丘に立地しており、山鹿市大字方保田字東原を中心に広がっている。遺跡がある台地は東から西に延びる舌状台地を呈しており、南に菊池川、北にはその支流の方保田川に挟まれ段丘西側で合流している。

2 歴史的環境

方保田東原遺跡が在る大道校区は以前、大道村と呼ばれていた。

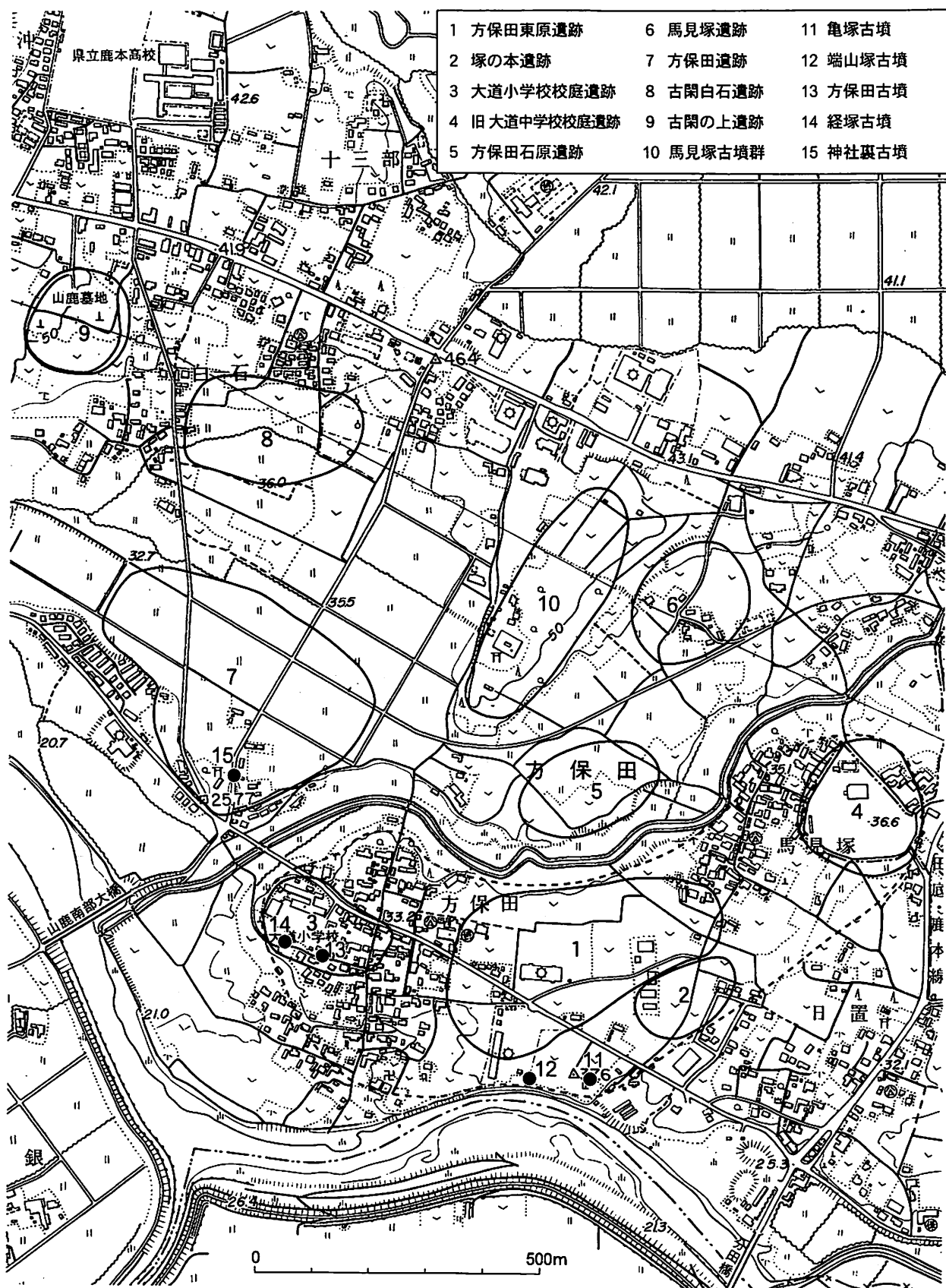
大道村は明治22年、中村、古閑村、方保田村、藤井村などの村々が合併したもので、昭和29年に山鹿市に合併してから大道村は学校区として名称を残し、中村、古閑村、方保田村、藤井村は大字区として今日に至っている。

山鹿市には全国一の数を誇る装飾古墳が残されているが、古墳の数が市内で最も多いのが大道区で、大道小学校に保存されている大正年間の記録からも知ることができる。表紙に「郷土史」と書かれたこの記録には、多くの資料と伴に古墳に関する資料が綴じてあり、次のような記載が見られる。

大道村に於ける古墳の数

A 完全なるもの…………… 10

B 半壊せるもの…………… 4



C 全壊して現在認むべきものなきも	
往時ありしこと明らかなるもの……	4
D 横穴……	0
計	18

古墳の種類

A 円形古墳……	10
B 瓢形古墳……	4

備考 他に多くの古墳を有せしが明治35～36年頃に至り水揚げ工事の時 多くの塚を破壊して石棺を掘り出したる為め現今其存在を認めず。

この中で書かれている古墳を紹介すると次の通りである。

中村 双子塚

古閑村 円墳（木下古墳）

方保田村 亀塚、端山古墳、清水山、中島、宮の裏、立石、経塚、馬見塚山4基（三ヶ塚ほか）

藤井村 前方後円墳

上段での数と一致しないが、この中には既に破壊されて現存しないものもあるが、これ以外にも新たに発見された横穴群などを考慮しても、菊池川流域で最も密集した地域と言えよう。

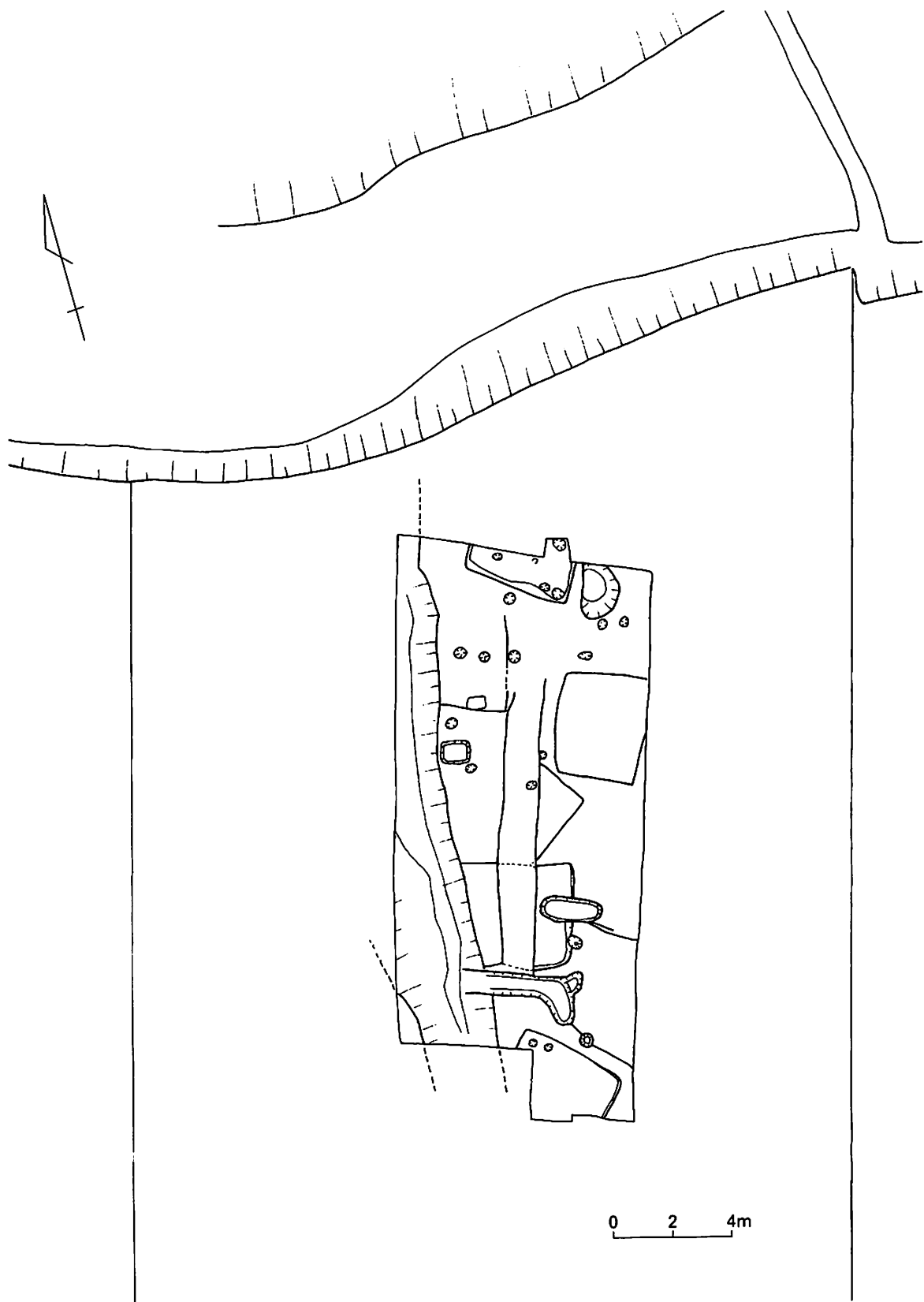
したがってこれらの古墳群を作り出した土壌として、方保田東原遺跡をはじめとした弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡群が注目されるところである。

現在方保田東原遺跡周辺の遺跡を概観すると、北側の方保田川を挟んで約200mのところに古墳時代前期の方保田石原遺跡（大字方保田字石原）が広がっている。さらに北側400mに同じく古墳時代前期の馬見塚遺跡（大字方保田字権現ノ前）が確認されている。これらの遺跡の西側に馬見塚古墳群を残す馬見塚の森（馬見塚山）が存在する。馬見塚古墳群を挟んで、西に広がっているのが弥生時代後期の方保田遺跡（大字方保田字平ノ上・尾跡）。その北側500mに古墳時代前期の古閑白石遺跡（大字古閑字辻）と古閑の上遺跡（大字古閑字古閑ノ上）などが見られる。

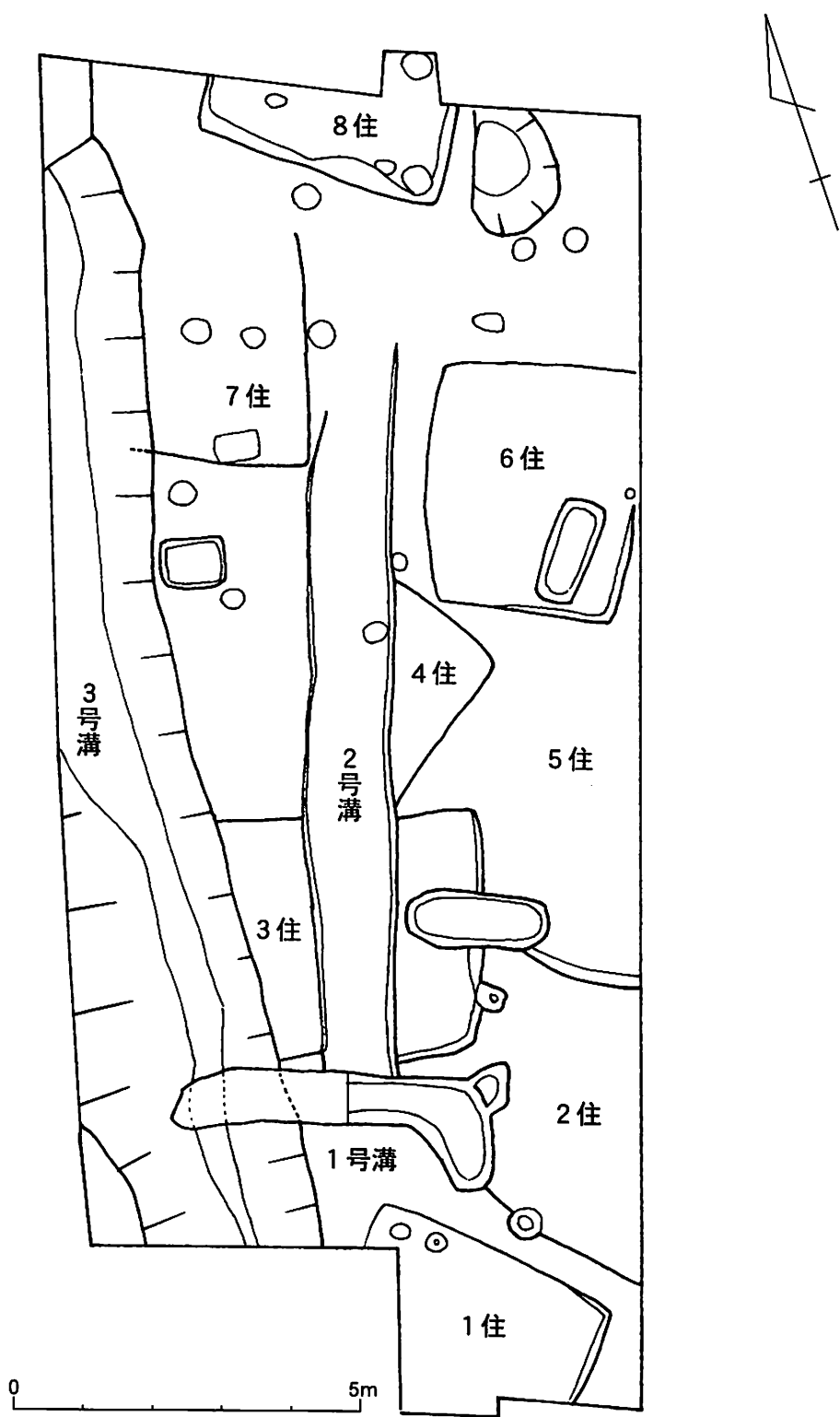
方保田東原遺跡の西に隣接するのが弥生時代後期の大道小学校校庭遺跡（大字方保田字本村）で、東に隣接するのが同じく弥生時代後期の旧大道中学校校庭遺跡（鹿本町大字来民字今古閑）などがあり、これらの遺跡群の中核を為すのが方保田東原遺跡である。しかしながら、隣接するこれらの遺跡は明確な空白地帯の確認に至っておらず、それぞれの遺跡の広がりと共に相互の関連性が注目される所である。



第2図 方保田東原遺跡周辺地形図



第3図 32-2番地測量図



第4図 32-2番地遺構配置図

Ⅲ 32-2番地の調査成果（村上家）

1 調査の概要（第3・4図）

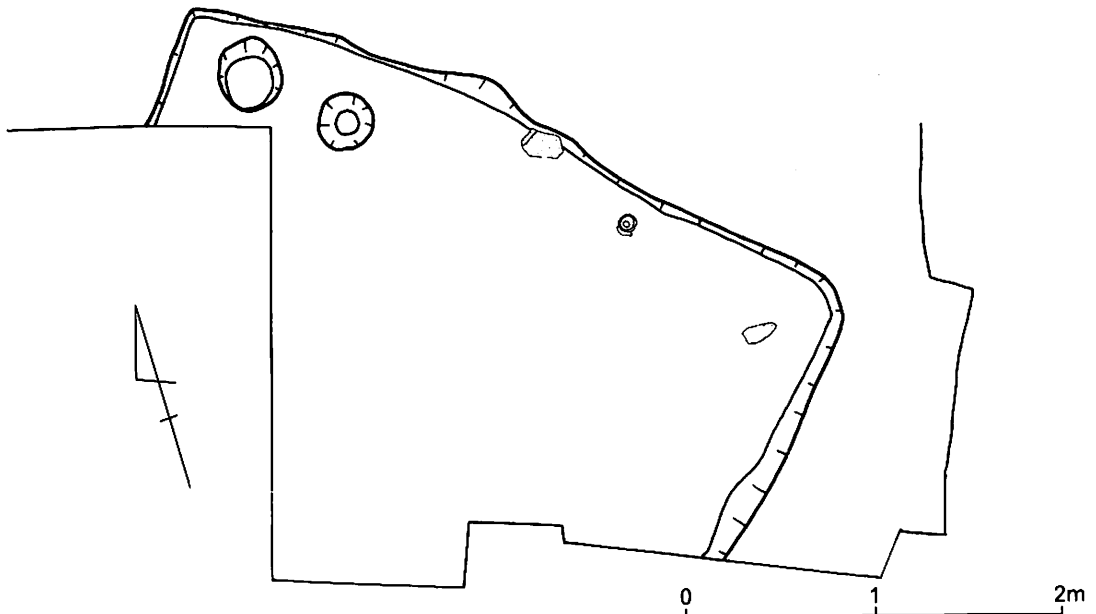
今回調査を実施した場所は方保田東原遺跡の中でも国指定史跡の範囲の北西端に接する所で、東側に隣接した所が昭和55年10月に鹿本高校考古学部によって調査された地点である。ここからは住居跡が確認されたのをはじめ銅鏃・男根状石製品などの貴重な遺物が出土しており、今回の調査でも遺構や遺物の出土が期待された。（註1）

調査は土地のほぼ中央で南北方向に長さ5m、幅50cmのトレンチを設定し遺構の状況の確認を行なった。その結果、銅鏃1点を検出したためトレンチを大幅に拡張し南北16m、東西8mの広がりの中を設定し、発掘調査を開始した。表土については機械による除去を行ない、その後の作業は手作業とした。なお、遺構の状況でトレンチを一部拡張したため調査面積は175㎡となった。

2 遺構と遺物

（1）1号住居跡（図版1-1、第5図）

調査区の南端に位置する隅丸方形の竪穴住居で、住居の南側半分以上が調査区外へ

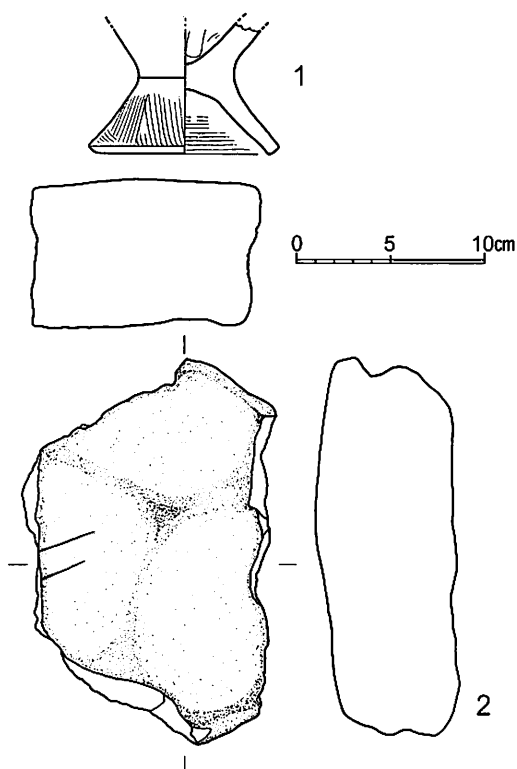


第5図 1号住居跡実測図

伸びている。南側の壁と西側の壁は調査区外で溝状遺構と交叉すると推察されるが、前後関係は不明である。したがって住居の規模は北側の壁面幅325cmを測ることができるのみで全体の規模は不明。東側の壁は比較的残りが良かったが、北側から西側にかけては僅かに確認できる程度であった。床面は強く硬化していたが炉は確認できなかった。遺物の出土は少なく実測できるものは僅かに2点のみであった。

遺物 (第6図)

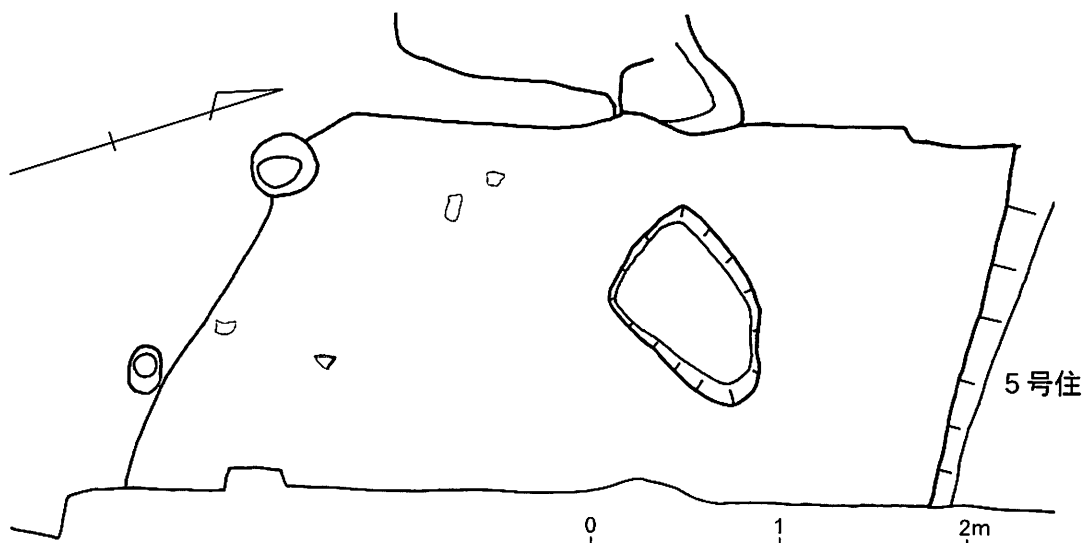
I (P-152)は在地系甕の脚台で脚本体を欠いている。脚裾部の直径は10.2cmで外面には縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目を施している。胎土には砂粒を含まず焼成もよく堅くしまっている。2 (S-10)は安山岩の



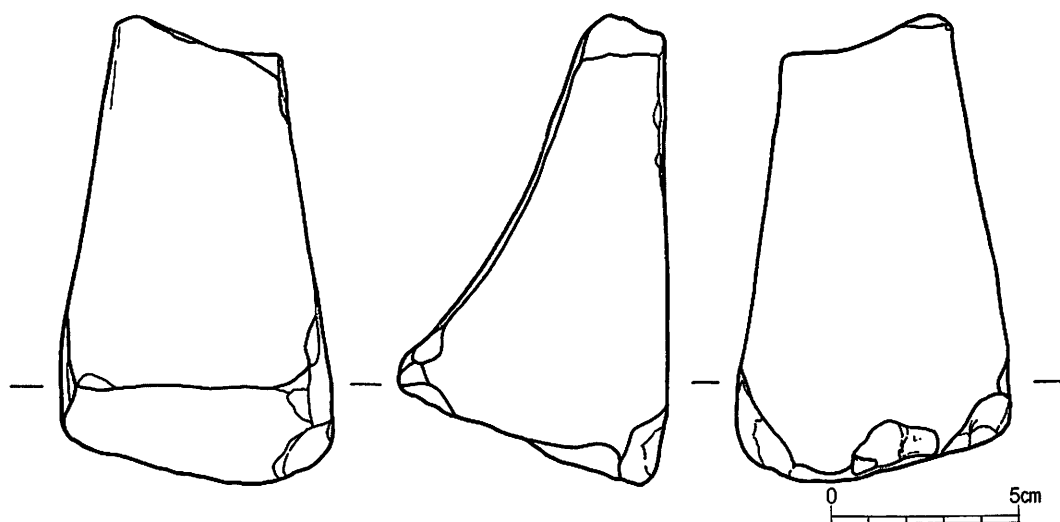
第6図 1号住居跡出土遺物実測図

(2) 2号住居跡 (第7図)

1号住居の北側に接するように位置しているが5号住居から北側の壁を切られ、東側の半分を調査区外に伸ばしている。したがって竪穴住居の本来の規模は不明である。



第7図 2号住居跡実測図



第8図 2号住居跡出土遺物実測図

壁面は南側壁面が僅かに残った状態で西側壁面は不鮮明であった。また床面は硬化面が見られず、その後土壌によって一部壊されている。

遺物 (図版7-1、第8図)

遺物は僅かに土器の破片が数点出土しているが、実測出来ないものばかりであった。

石器として3(S-7)の砥石が1点出土している。砂岩製で先端を欠いているが現長11.3cm、重さ700gを測る。4面はかなり使い込んでおり使用頻度の高さを示している。

(3) 3号住居跡 (図版2-1・2、第9図)

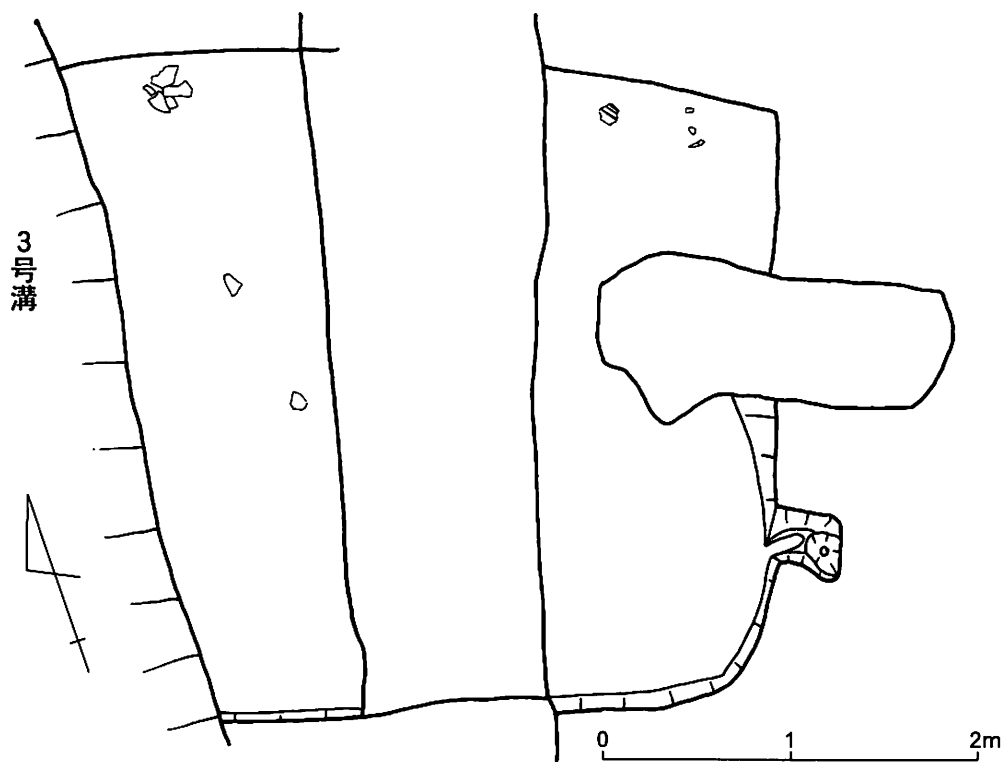
住居の中心を2号溝が南北に走り、東側壁面では一部を土壌で切られていたが、埋土の状況から住居は3号溝埋没後築かれていた。また北側では4号住居と重複しているが、床面の状況から僅かに先行することが確認できた。

東側壁面を300cmと測るのみで竪穴住居の規模は不明である。床は硬化面が全面に残っていた。遺物は僅かに出土している。

遺物 (図版7-2、第10図)

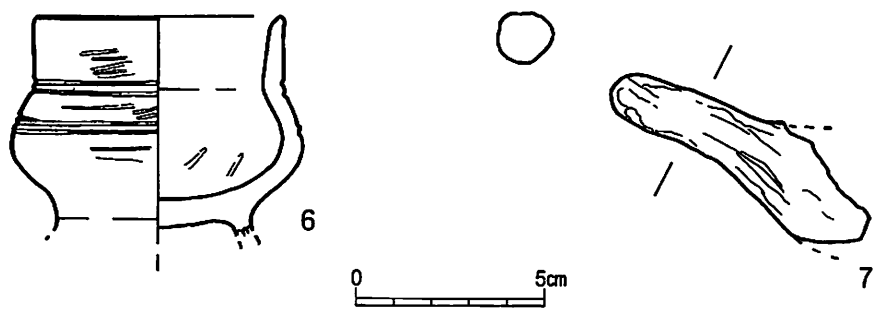
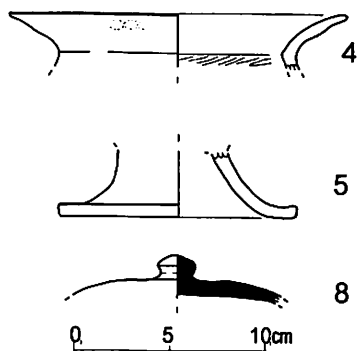
4(P-134)は甕の口縁部片である。5(P-133)は鉢の脚部で裾部直径12.6cmを測る。器面は全面にナデ仕上げを行なっている。胎土には砂粒を含むが焼成も良く、堅く締まり色調は茶褐色を呈している。

6(P-5)は小型の壺である。口縁部の一部と脚部を欠いているが、ほぼ完全な形を示している。口縁部は直口し、胴部の膨らみも小さく頸部と肩部にそれぞれ2本の沈線を巡らしている。口径6.6cm、最大径7.7cm、高さは現高6cmを測る。器面は外面に

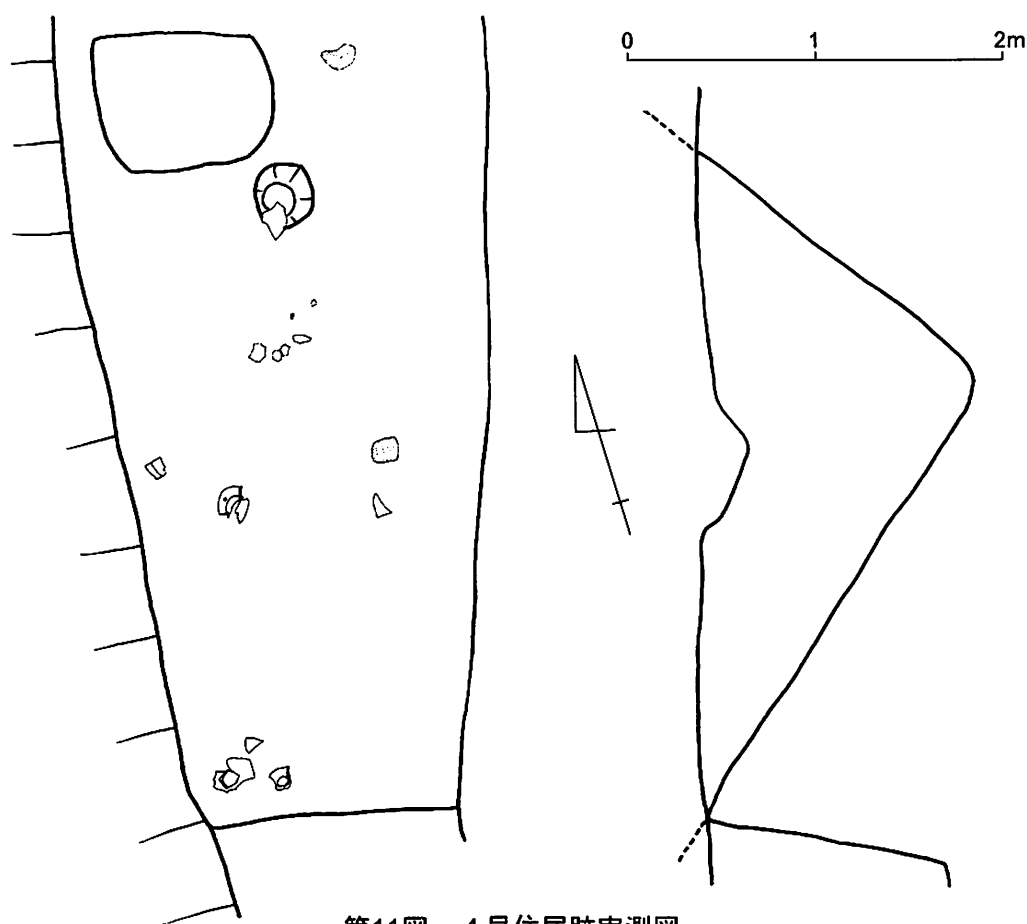


第9図 3号住居跡実測図

ヘラ研磨、内面にナデ仕上げを行なっている。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くなく色調は茶褐色を呈している。
7(P-134)は土製柄杓で本体の殆どを欠いており、現長7.7cm、柄の直径1.5cmを測る。8(P-132)は須恵の杯蓋で宝珠状の摘みを有している。これは混入したものである。



第10図 3号住居跡出土遺物実測図



第11図 4号住居跡実測図

(4) 4号住居跡 (図版1-2・3、第11図)

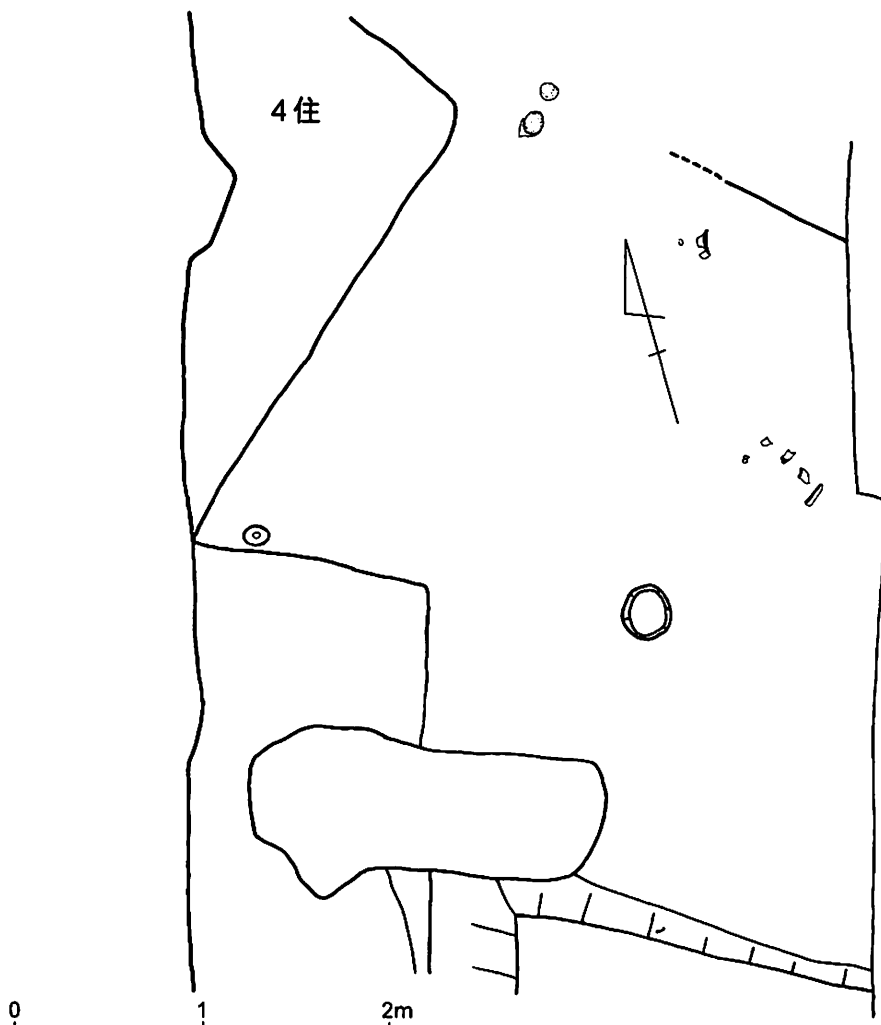
3号住居跡の北側に位置し、北側と東側の壁の一部を僅かに残し3号溝埋没後築かれていた。しかし住居跡の大半を切られており、とくに西側は2号溝によって切られ、南側も3号住居跡と重複している。3号住居の北側で交差するように2号溝から切られているため前後関係は確認できなかった。3号住居跡の北側壁面の残り具合から考えて4号住居跡が先行するものと思われる。

遺物は破片が僅かに出土しているが、実測に堪えうるものは見られなかった。

(5) 5号住居跡 (第12図)

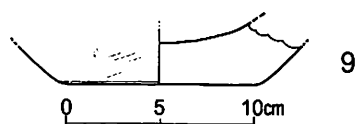
この住居は南側の壁面を残すのみで、東は調査区の外に伸ばし、西は3・4号住居に切られ北側では僅かに一部の壁面を残すのみであった。したがって住居に規模は不明だが南北4m程度の大きさになることのみ確認された。

遺物 (第13図)



第12図 5号住居跡実測図

遺物は破片が出土しているが、実測に堪えるものは他に見られなかったが、僅かに9 (P-138) のみで器壁が厚く壺の底部になる。

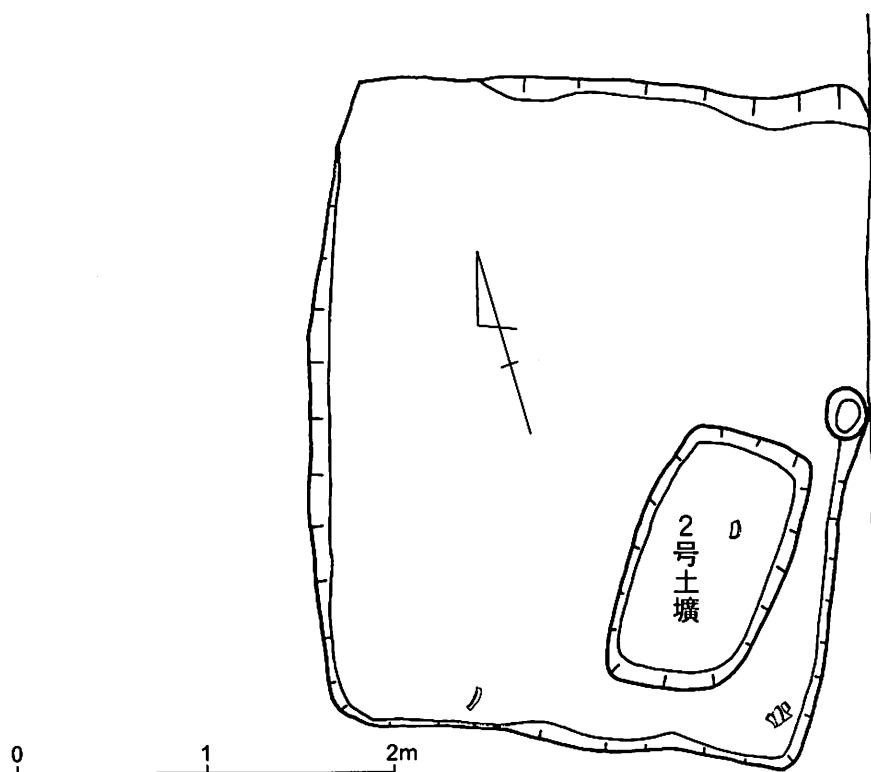


第13図 5号住居跡出土遺物実測図

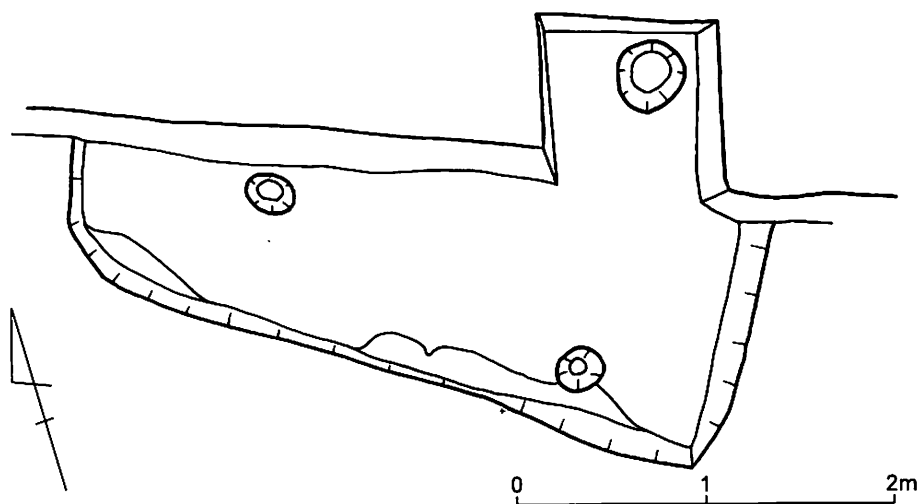
(6) 6号住居跡 (第14図)

僅かに東側の壁面の一部を調査区外に伸ばしているが、主軸を南東に向けて長辺3.5m、短辺約3mの長方形をしていてほぼ完全な状態で壁面が残っていた。しかし、床面には硬化面が見られず柱穴も未確認である。また南側には上面から土壌が掘られていた。

遺物は少なく、僅かに弥生時代終末期の鉢や高杯の破損と鉄片数点が出土している程度である。



第14图 6号住居跡実測図



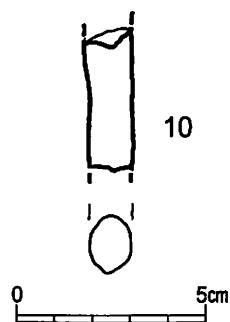
第15图 7号住居跡実測図

(7) 7号住居跡 (第15図)

調査区北側に位置し、住居の大半を調査区外に伸ばしていたため、隅丸方形の主軸を南北に向け南辺の長さ3.5mを測るのみで、全体の規模は不明である。壁面の残りは良く20cm程度の高さを残していた。

遺物 (第16図)

遺物は極めて少なく僅かに10 (P-504) の手捏の土製品のみで、スプーンの柄である。



第16図 7号住居跡出土遺物実測図

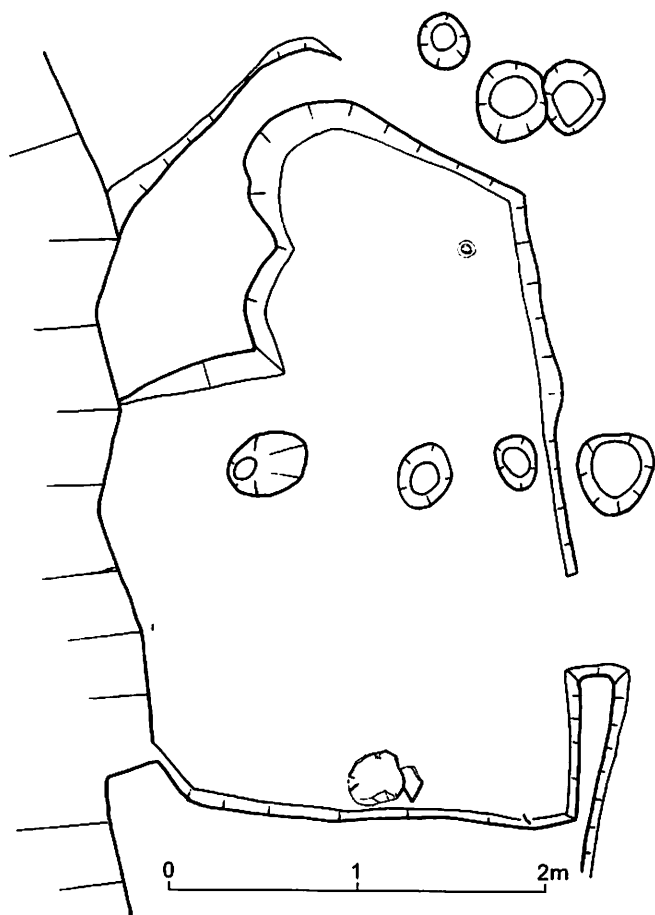
(8) 8号住居跡 (第17図)

7号住居の南に位置しているが、西側を3号溝によって切られており、北側の壁もやや不整形である。したがって東側の壁面は長さ3.3mを測るが、他の壁面の長さは不明である。遺物は壁に沿うように出土している。

遺物 (図版7-3、第18図)

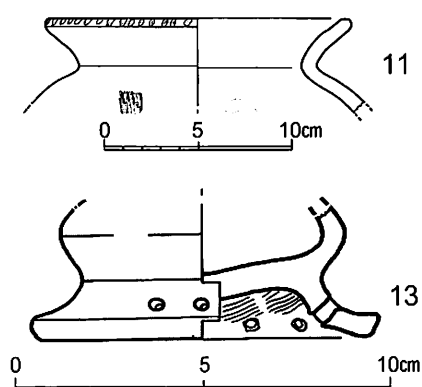
11 (P-505) は壺の口縁部である。口唇部に刻み目を施している。

12 (P-502) は口縁部を欠いた壺である。胴部の一部欠いているが丸底である。器面は頸部に



第17図 8号住居跡実測図

刻み目、胴部には右下がりにタタキ目の上にハケ目を施し、底部は縦方向にハケ目を施している。内面は肩部を粗いハケ目、胴部を細かいハケ目で仕上げを行なっている。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くなく色調は茶褐色を呈している。



第18図 8号住居跡出土遺物実測図

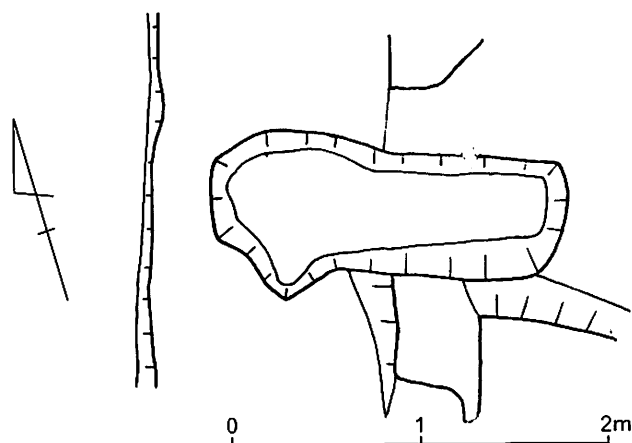
13 (P-503) は手握の脚付きの鉢である。脚部には2個ずつ2ヶ所に孔を配している。

(9) 1号土壙 (第19図)

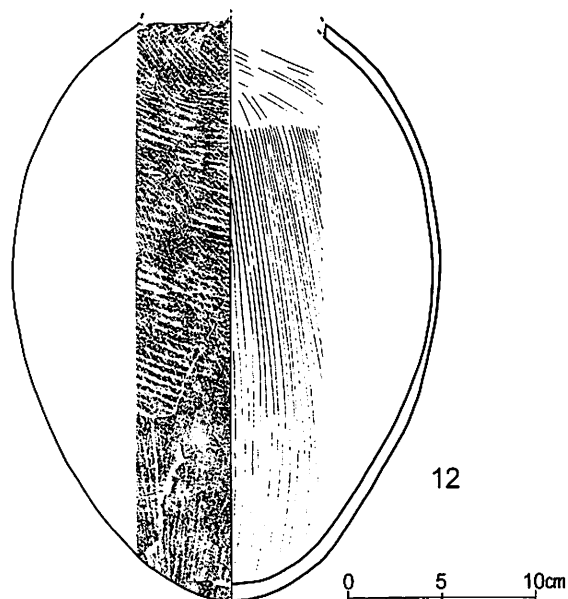
3号住居と5号住居を跨ぐように掘られていた。主軸をほぼ東西に向け、長さ190cm、幅65cm、深さ25cmを測り、基本的には長方形だが西側はやや乱れていた。

遺物 (図版2-3,7-4、第20図)

遺物は少なく唯一出土したのが14の銅鏃である。試掘の際出土したため出土状況は明らかでないが、先端が欠損しているが保存状態は極めて良く光沢を保った資料であった。鏃を有し特異な形態をしている。



第19図 1号土壙実測図



第20図 1号土壙出土遺物実測図

(10) 2号土壙 (第21図)

6号住居の中に掘られており、主軸を北東に向け長さ140cm、幅80cm、深さ25cm程度で遺物の出土は少ない。

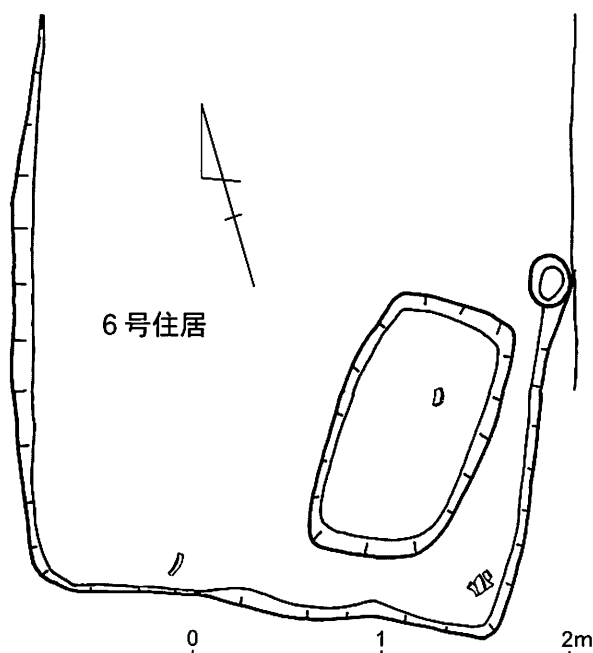
(11) 3号土壙 (第22図)

長さ90cm、幅70cmの土壙で中から高坪が出土している。とくに今回調査で出土した土器の中では一番古くなるようである。

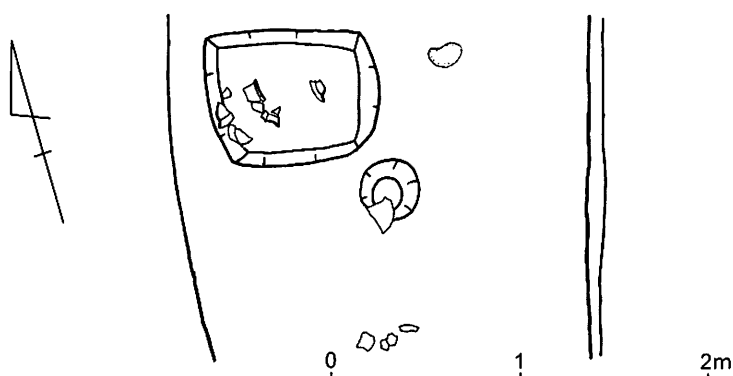
遺物 (第23図)

15 (P-501) は在地系の甕で胴部以下を欠いているが、底部は脚台になる。器面はハケ目調整である。

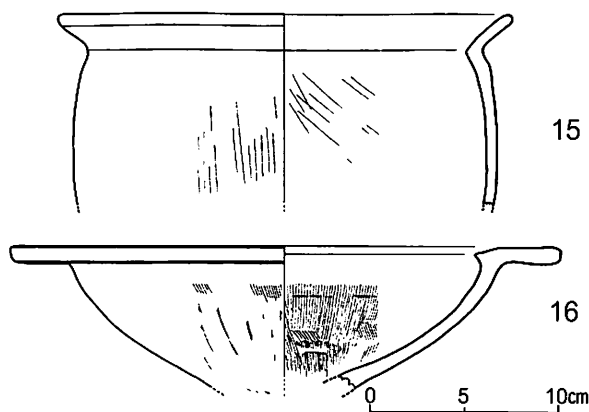
16 (P-501) は高坪であるが、坪の半分のみを残し脚部などは欠いている。口縁部は水平に開き、杯部は比較的深く丸味を持っている。器面は口縁部に外面はナデ仕上げ、胴部には粗いハケ目の上からナデ仕上げを施している。胴部内面は粗いハケ目で仕上げを行なっている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く色調は茶褐色を呈している。



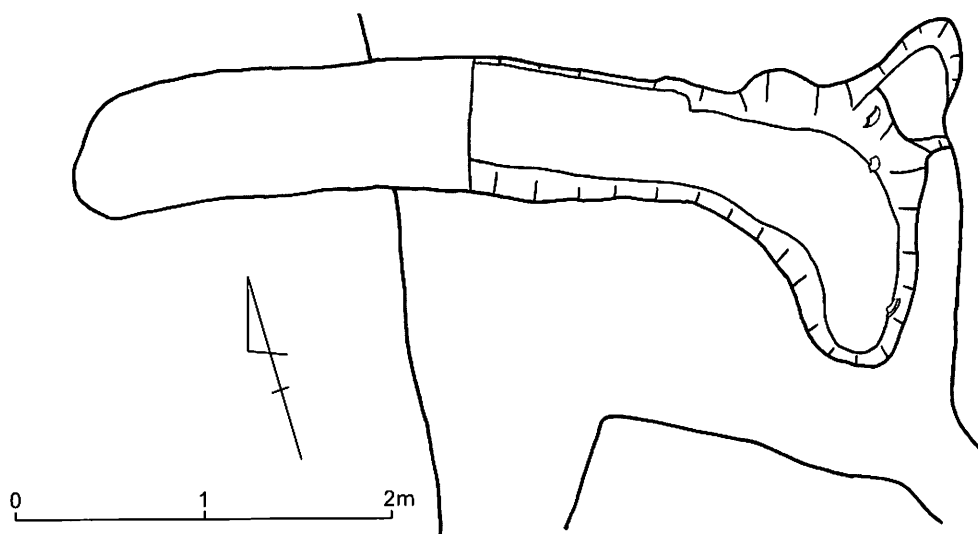
第21図 2号土壙実測図



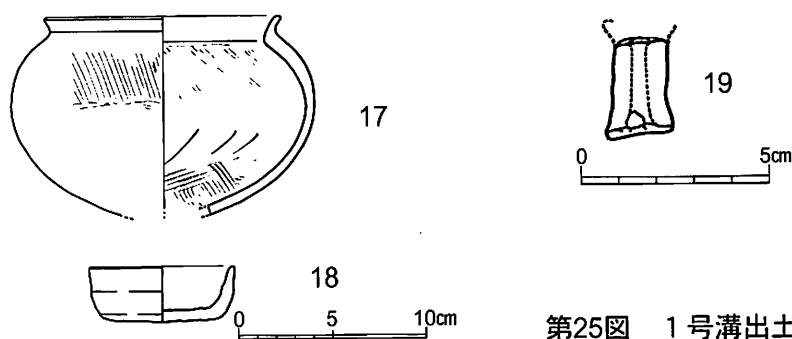
第22図 3号土壙実測図



第23図 3号土壙出土遺物実測図



第24図 1号溝実測図



第25図 1号溝出土遺物実測図

(12) 1号溝 (第24図)

1号住居の南に位置し2号溝と3号溝を切っているが、溝としては短く東西に4m、東端が南へ1m曲がっており、幅70m、深さ20cmを測る。

両端部は不明確ではあったが、これ以上伸びる様子は見られず、溝の性格は不明である。

遺物は土師器が主であるが実測できるものが少なかった。

遺物 (第25図)

17 (P-145) は鉢である。底部を欠くが口縁部は小さく立ち上がり、胴部は膨らみをもって底部に向っている。18 (P-141) は土師の灯明皿である。19は上下の端部を欠いているがミニチュアの器台である。

(13) 2号溝 (第26図)

調査区の中心に主軸に沿って幅1.2～1.3m、長さ10.5mの規模で延びているが、両端は不鮮明に消えている。溝としては残りが浅く1号溝から切られているが住居跡を切っていた。

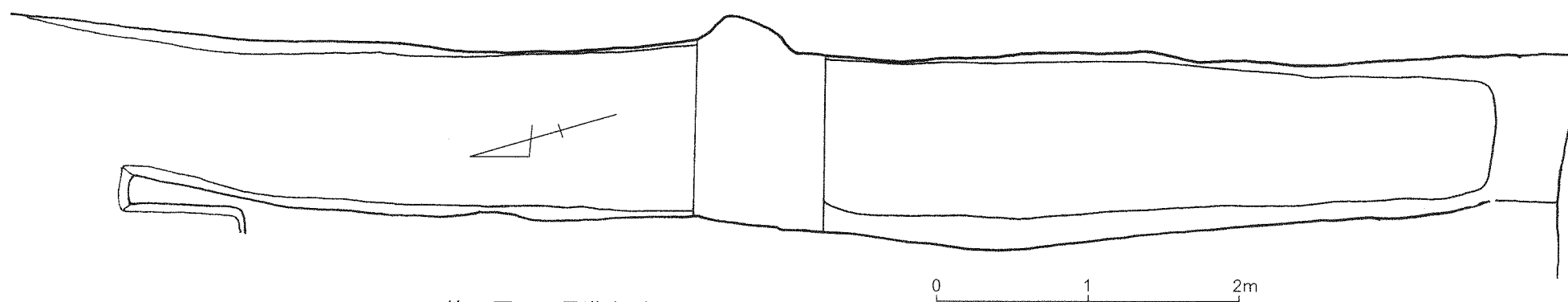
遺物 (図版7-5、第27図)

20 (P-500) は鉢である。仕上げは粗く粘土の皴も残っている。21 (P-139) は大型壺の口縁部片である。口唇部は内湾しつつ立ち上がっている。22 (P-117) はスプーンの柄である。23は土製玉である。24 (P-4) は鉄鉢形の土師器である。25 (P-135) は土師の杯である。

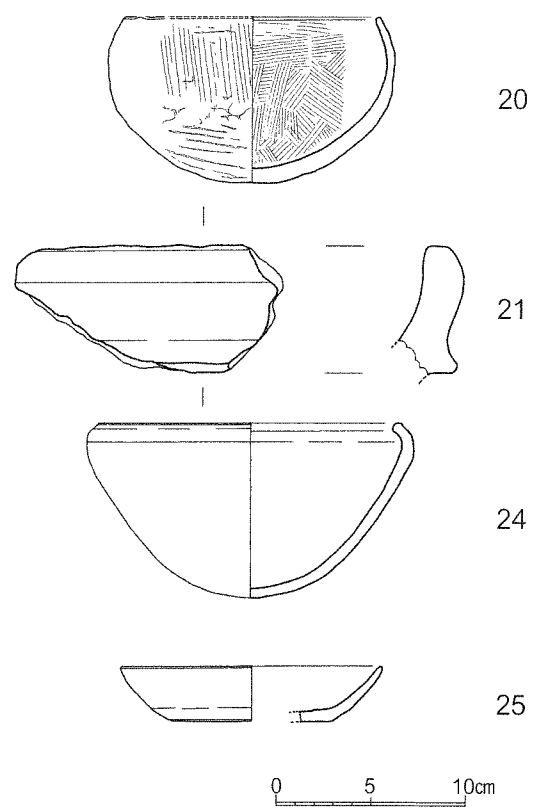
(14) 3号溝 (図版3・4、第28図)

調査区西側に沿って南北方向に長さ16mに亘って検出されたもので、明らかに台地を断ち切るような形で台地北端に延びている。端部が切り通しになるのか東西いずれかに曲がるのかは確認できなかった。北側に向って溝の幅が広くなっており、溝の断面は南端ではV字形で、北に進むに従って逆台形になる。溝東側斜面の傾斜は急で、西側は緩やかである。溝の中には大量の土器が廃棄されており、堆積状況から上層と下層に分けて取上げた。

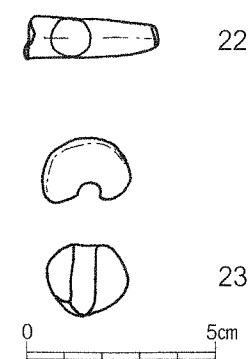
基本的には在地系甕が少なく、大半は外来系の甕を主体に出土しており、庄内～布留の時期であった。

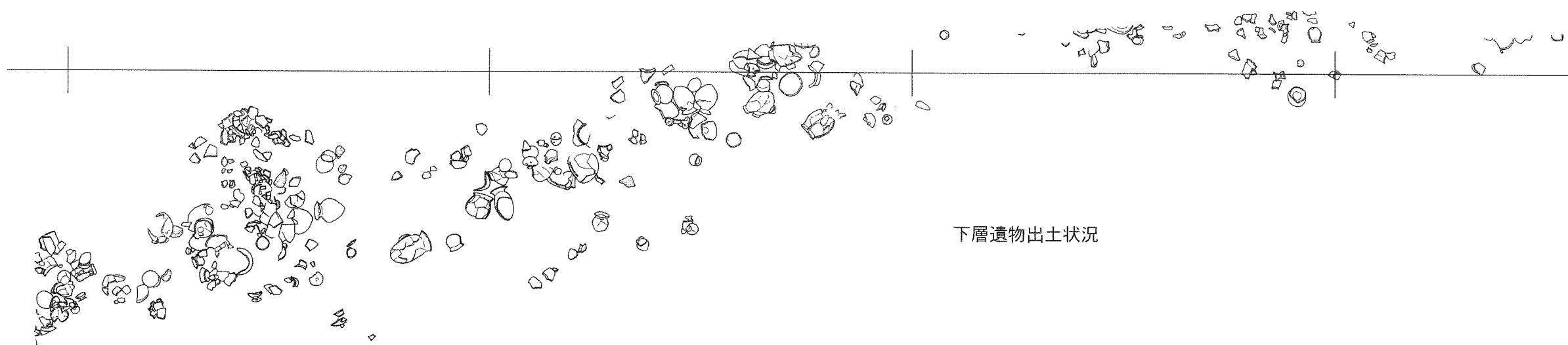
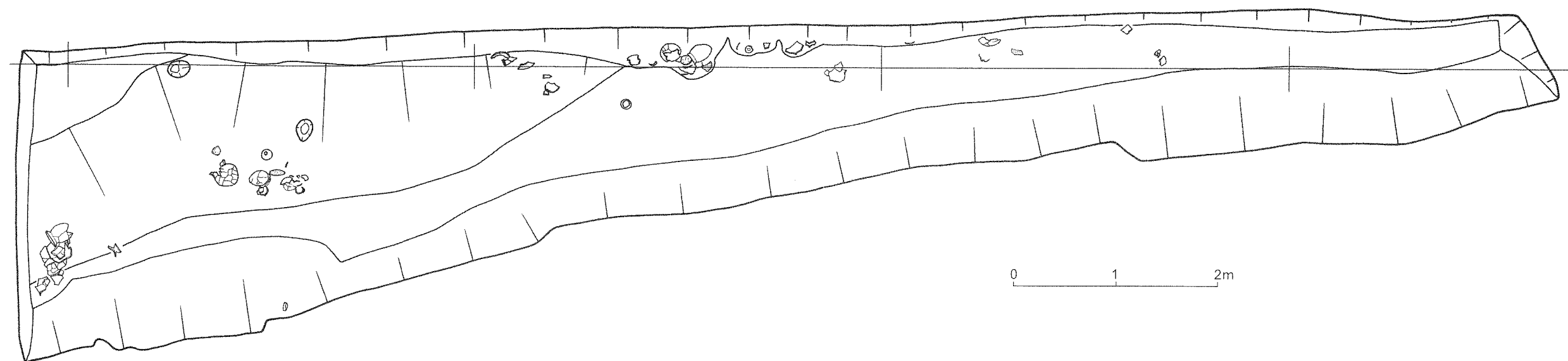


第26図 2号溝実測図

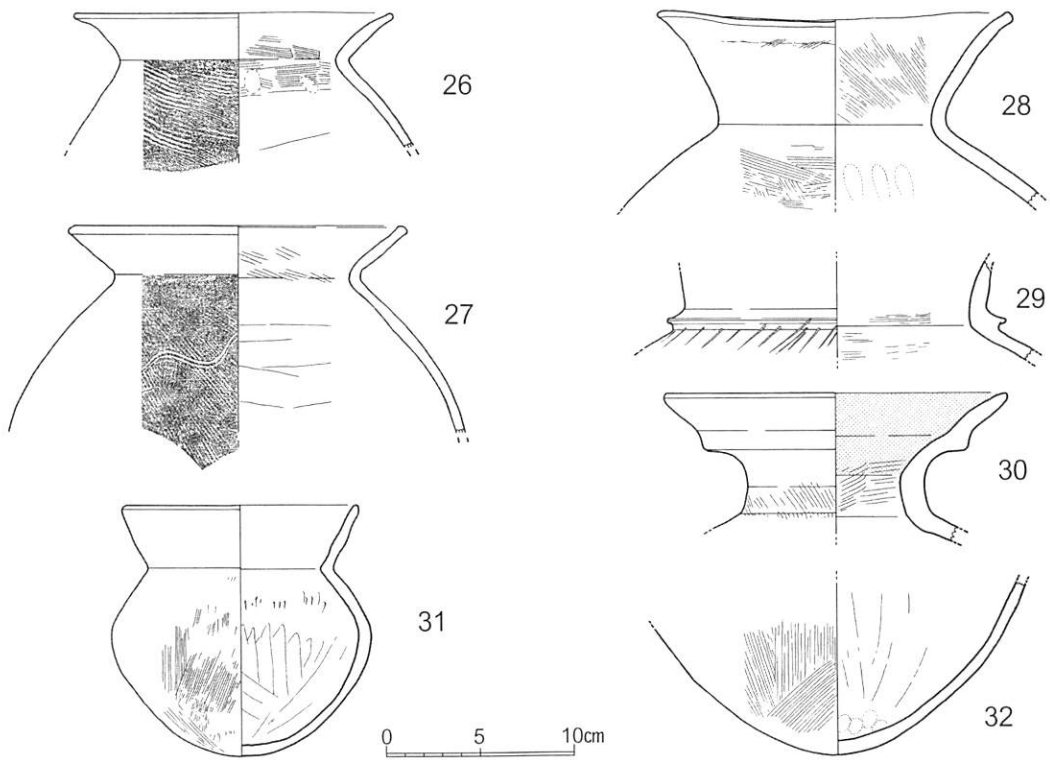


第27図 2号溝出土遺物実測図





第28図 3号溝実測図



第29図 3号溝(上層)出土遺物実測図

遺物 (図版7-8、第29～41図)

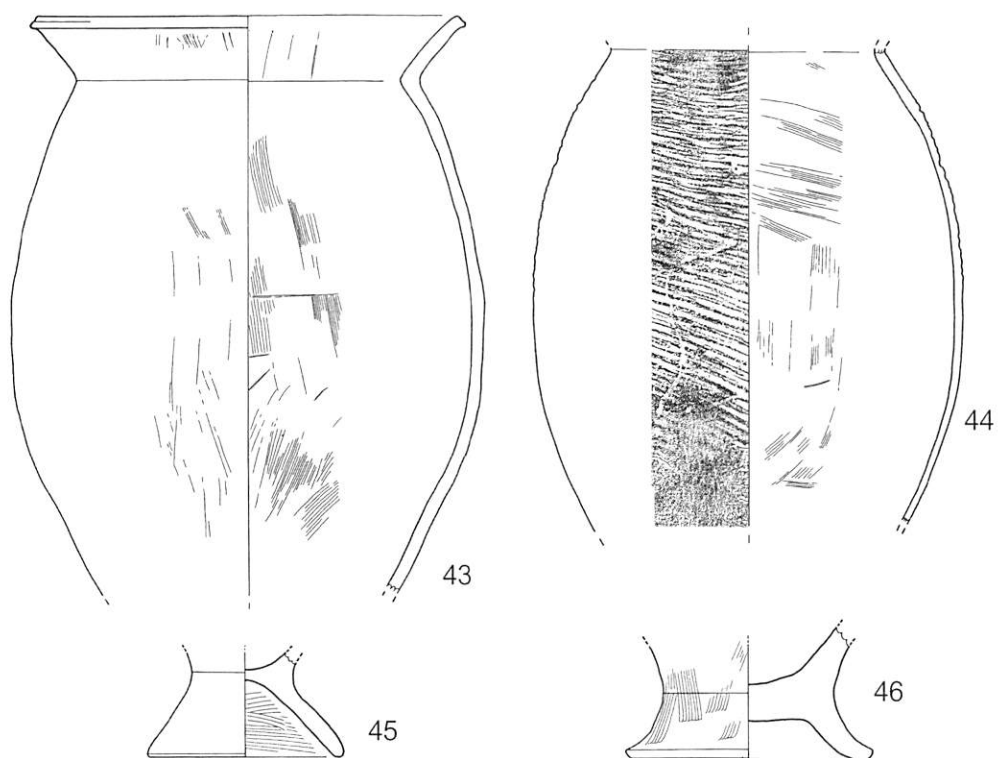
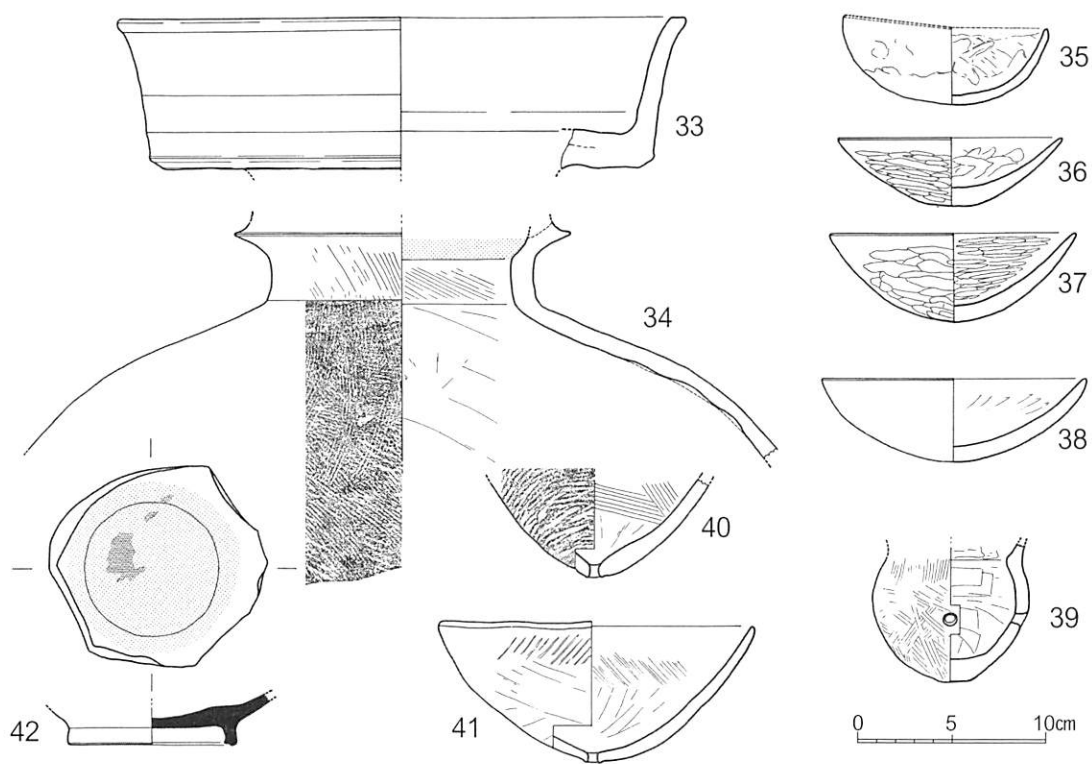
上層の遺物

26は庄内系の甕で27 (P-379) は布留系の甕で共に底部を欠いている。28から34までは壺であるが、30、33、34は二重口縁壺である。35～38は皿状の鉢である。39は小形の壺の胴部に穿孔したもので二次的に穿孔したのではなく当初からのものであった。注口土器としての機能を有している。40と41は鉢の形状をした甕である。42は須恵器の高台付き碗であるが内面に墨が付着している事から碗の代用品とされていたものである。

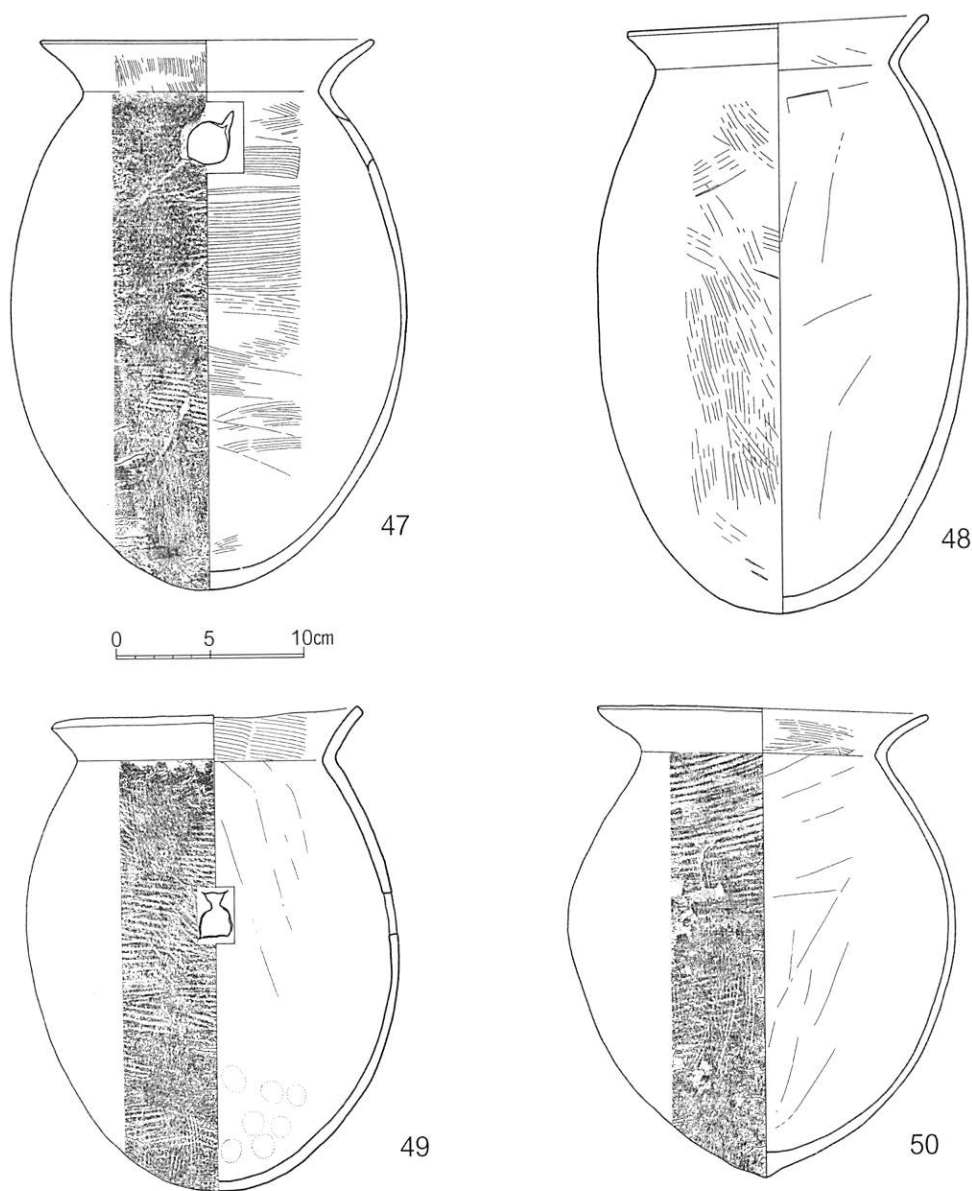
下層の遺物

43 (P-276) は在地系甕で底部を欠いているが脚台になる。44 (P-251) も在地系甕で口縁部と底部を欠いている。45 (P-338)、46 (P-86) は在地系甕の脚台である。

47 (P-348) は外来系甕で肩部に二次的な穿孔がある。48 (P-250) は在地系甕で丸底になっている。49 (P-347) は外来系 (庄内期) 甕で胴部に二次的な穿孔がある。50 (P-345) から56 (P-296) も外来系 (庄内期) の甕である。57 (P-277) から59 (P-295) は小形の甕で57、58 (P-302) には二次的な穿孔がある。



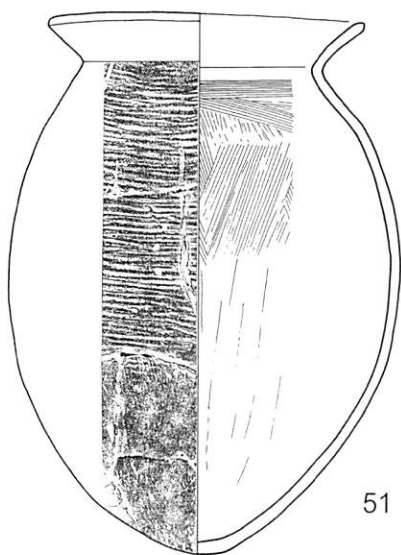
第30図 3号溝(下層)出土遺物実測図



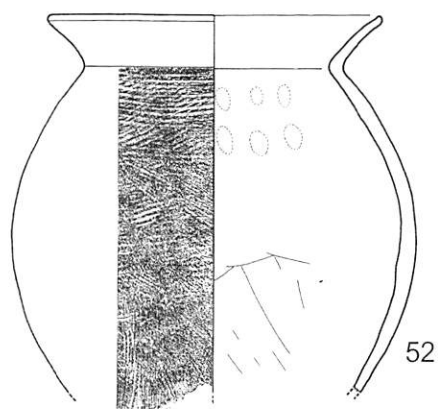
第31図 3号溝(下層)出土遺物実測図

60 (P-298) 以降71 (P-362) までは外来系 (布留期) の甕である。61 (P-253) と67 (P-248) にも二次的な穿孔がある。肩部に櫛描き波状文を描いているのが61 と64 (P-337) である。

72 (P-309) から93 (P-110) までは壺である。口縁部の特徴から大きく3種類に分けることができ、72から75 (P-256) は口縁部が大きく開き、76 (P-372) から82 (P-200) までは口縁部が直線的に広がっている。83 (P-238) から89 (P-350) までは二重口縁の壺で、89は山陰地方とくに出雲地域の特色を示したものである。

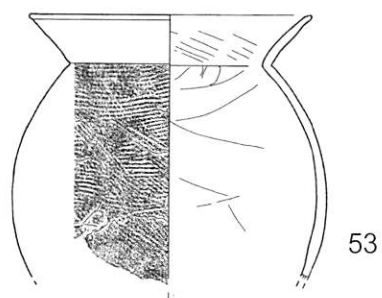


51

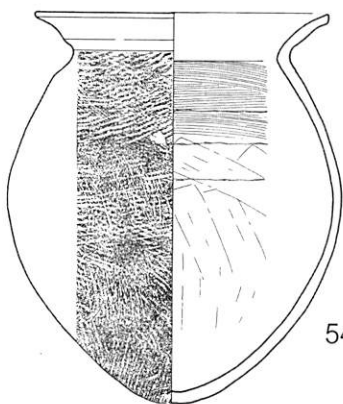


52

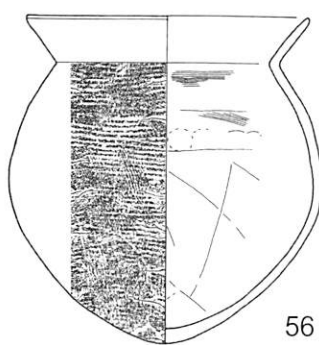
0 5 10cm



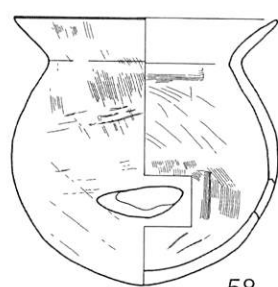
53



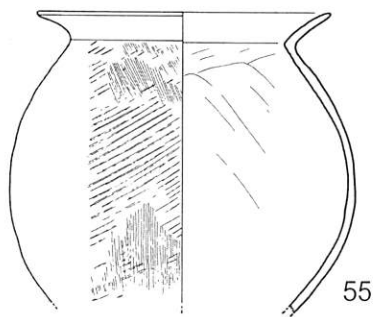
54



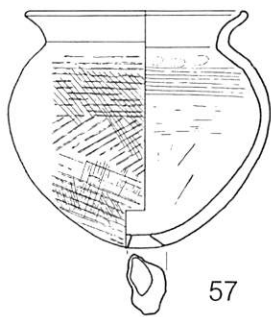
56



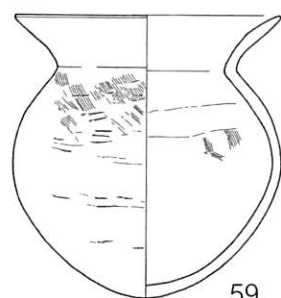
58



55

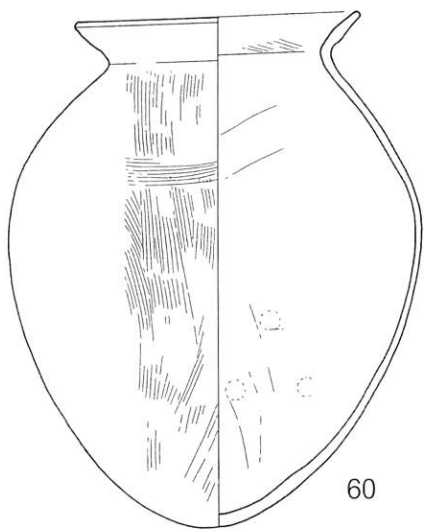


57

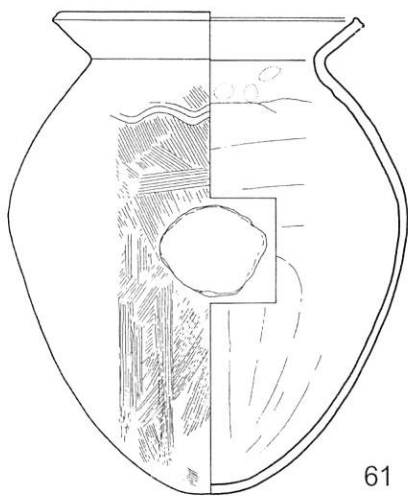


59

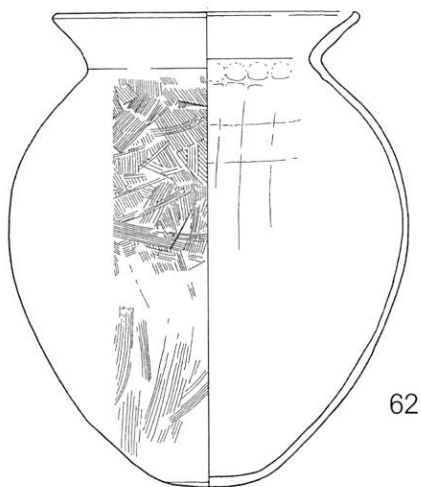
第32図 3号溝(下層)出土遺物実測図



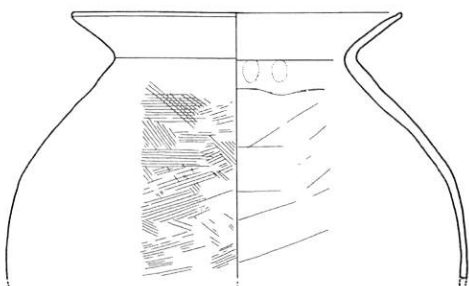
60



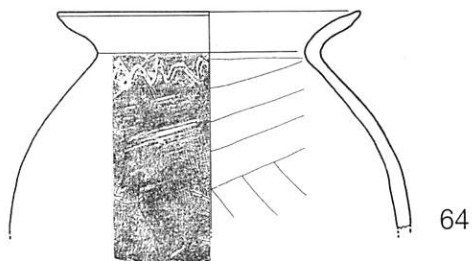
61



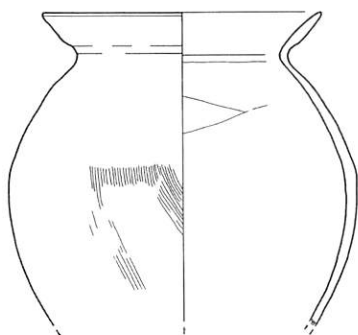
62



63



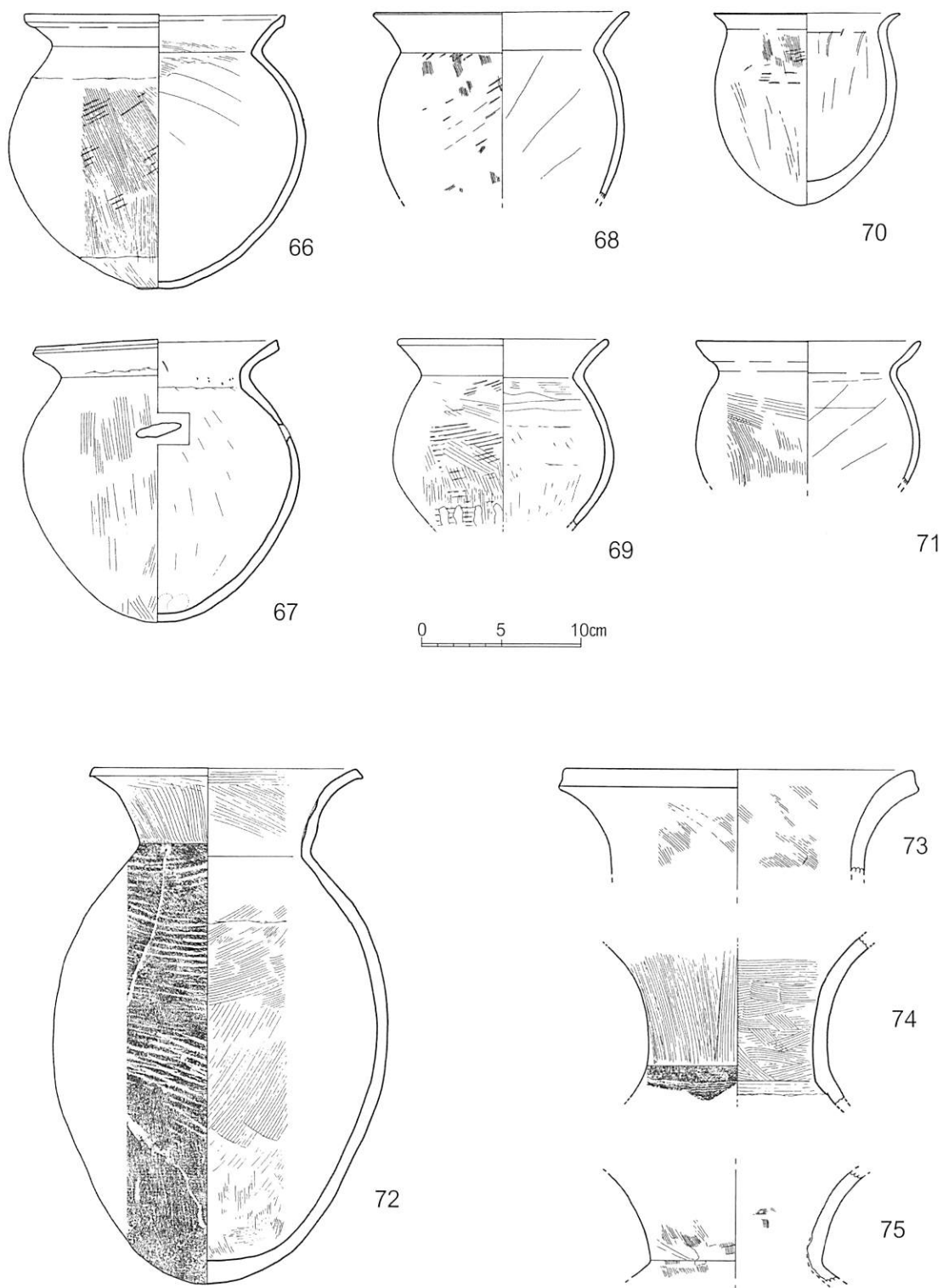
64



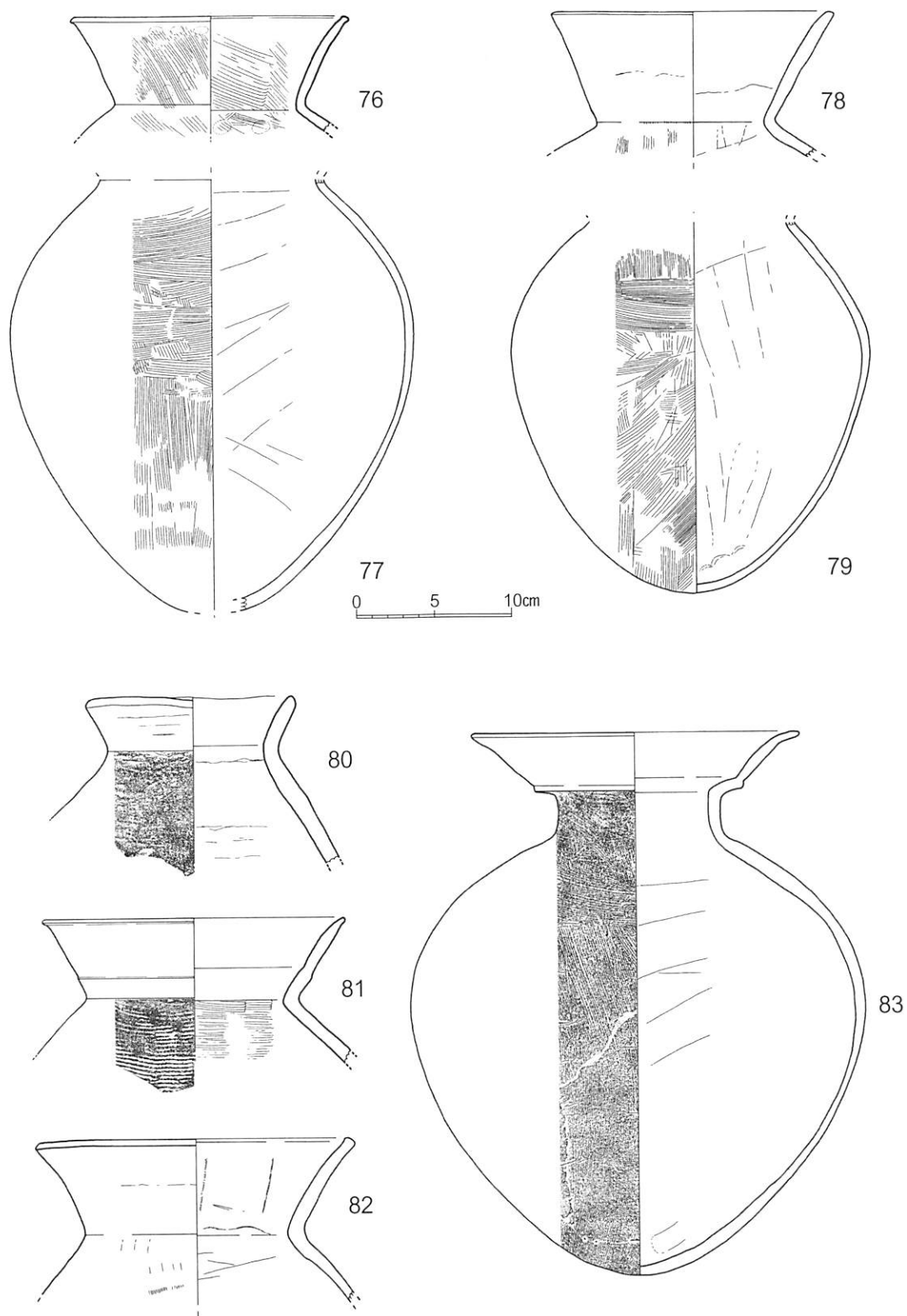
65

0 5 10cm

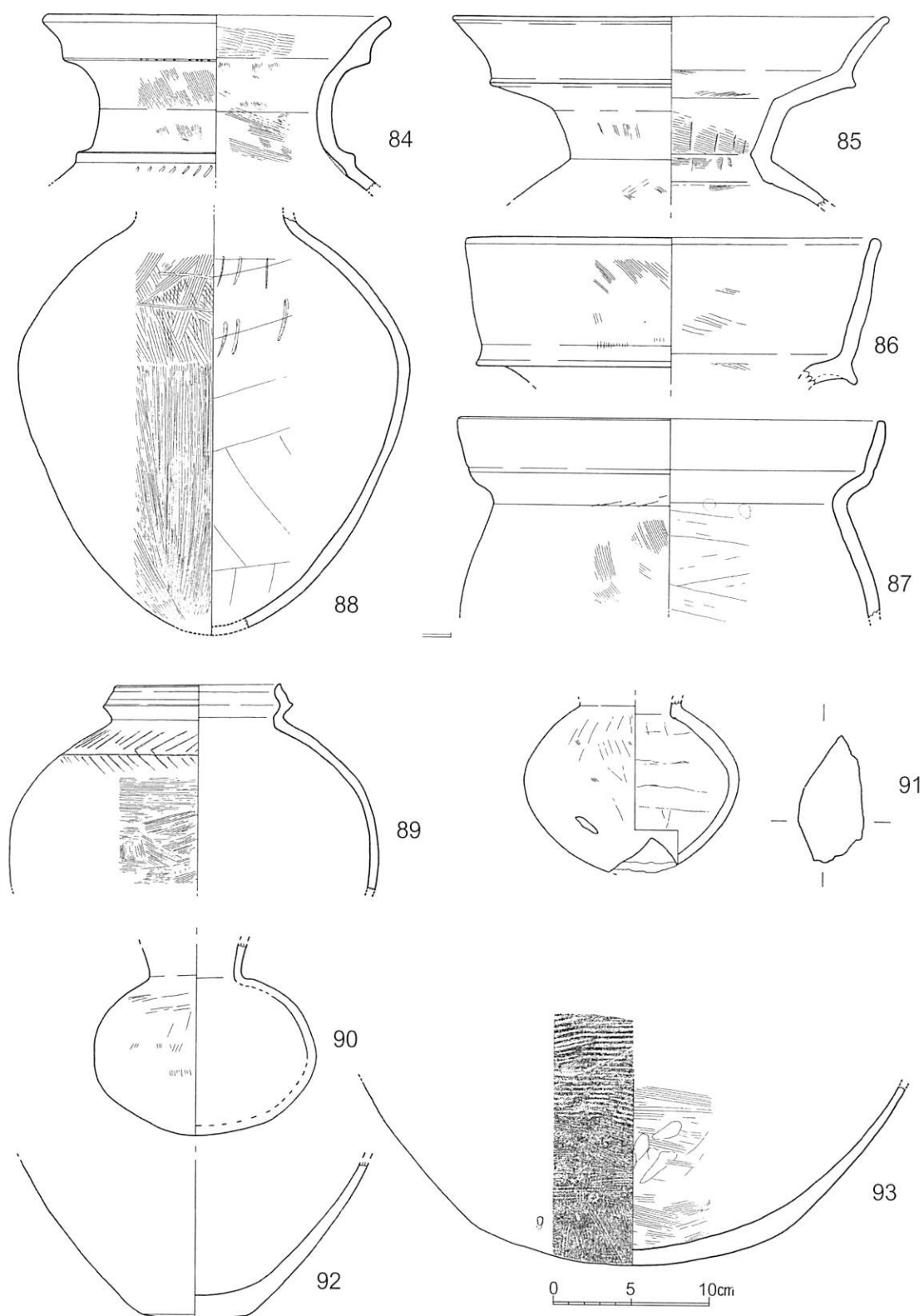
第33図 3号溝(下層)出土遺物実測図



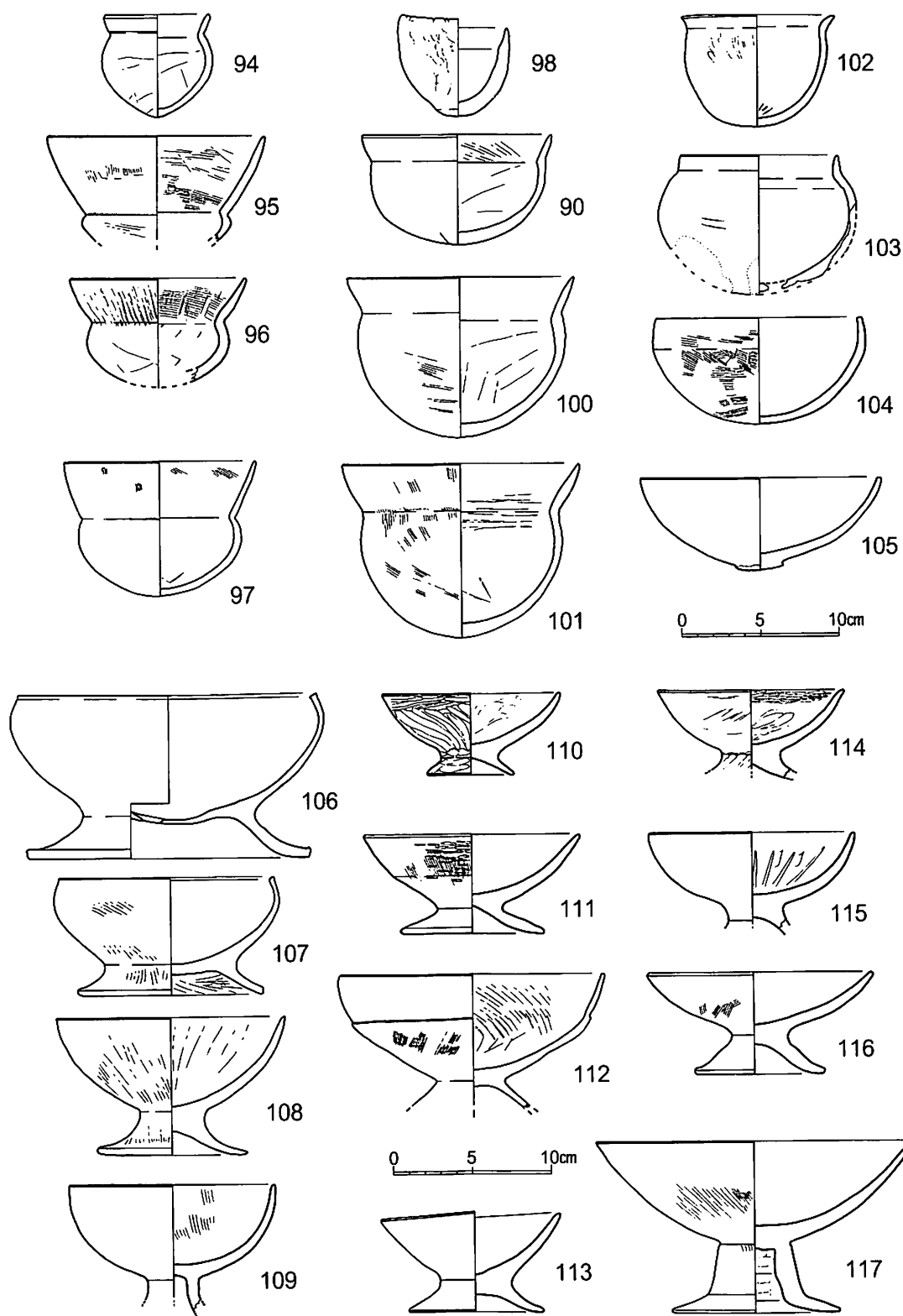
第34図 3号溝(下層)出土遺物実測図



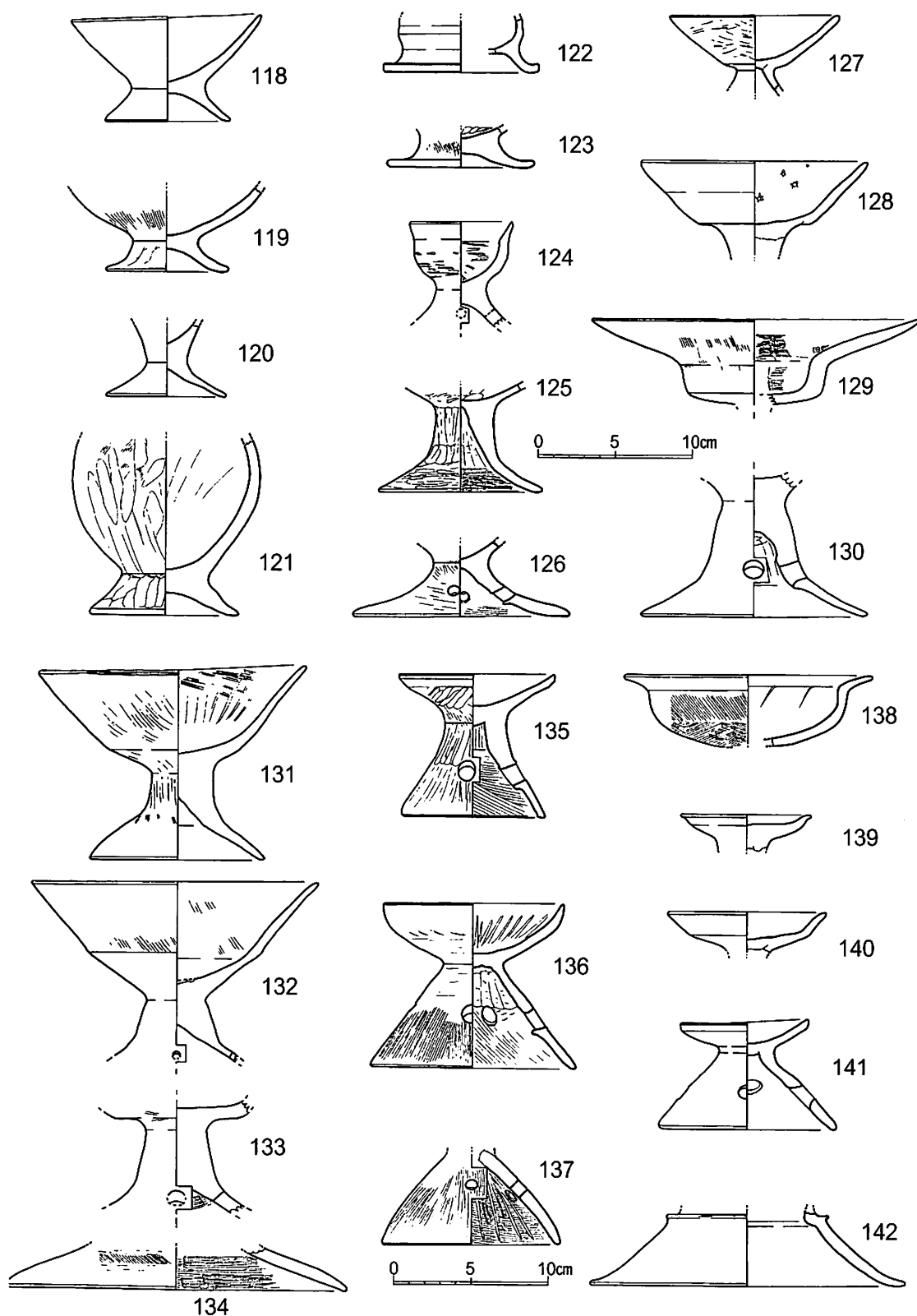
第35図 3号溝(下層)出土遺物実測図



第36図 3号溝(下層)出土遺物実測図



第37図 3号溝(下層)出土遺物実測図



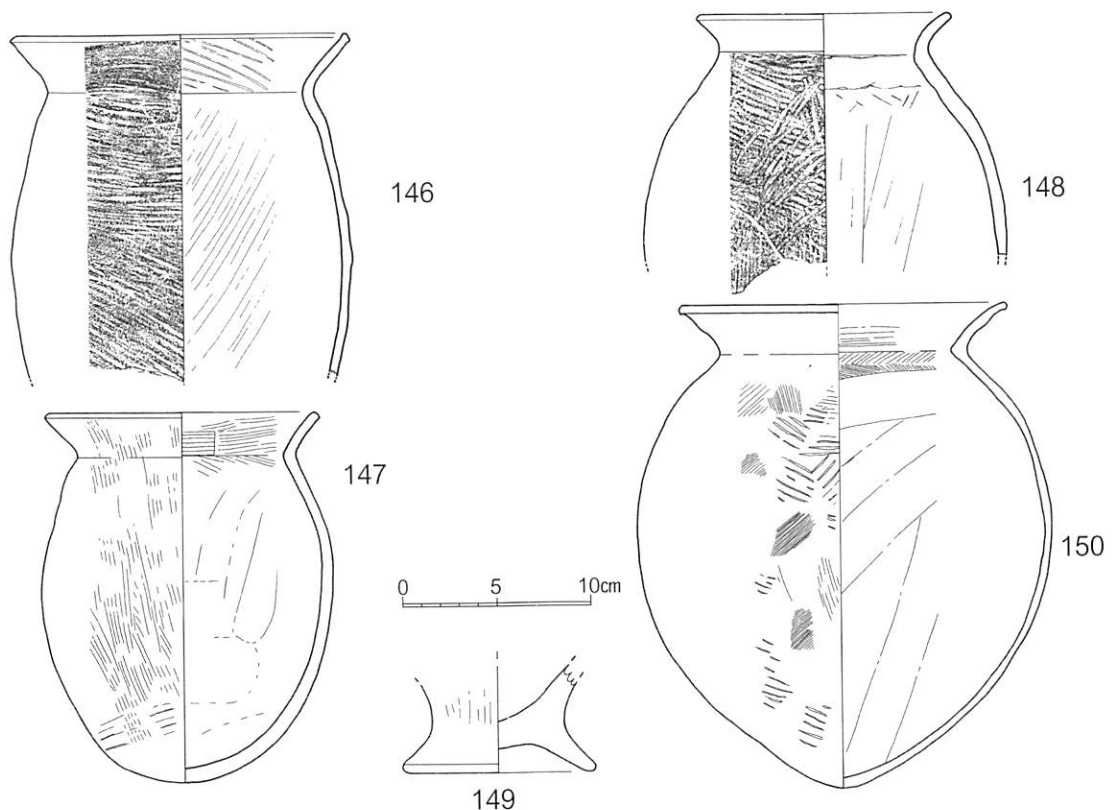
第38图 3号溝(下層)出土遺物実測図

94 (P-316) から101 (P-223) までは小型丸底壺であるが、98 (P-252) と102 (P-385) から126 (P-335) までは鉢である。形状から丸底、脚台付きとに分けられる。

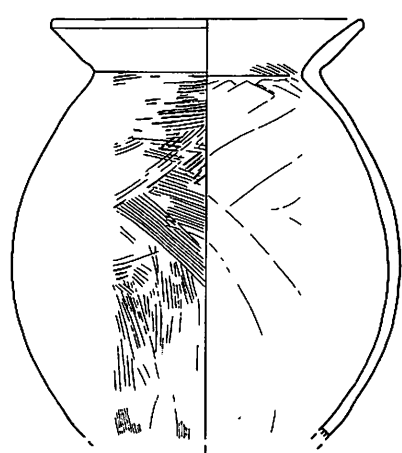
127 (P-98) から134 (P-384) は高杯である。135 (P-371) から142 (P-82) は器台であるが、これも形状から外来系の器台のみである。ただし138 (P-109) は高杯に含まれよう。135～137 (P-318) は脚付き鉢にも近い形である。142 (P-82) は山陰系の鼓形器台である。143 (P-378) ～145 (P-209) は甑である。

南断面一括資料

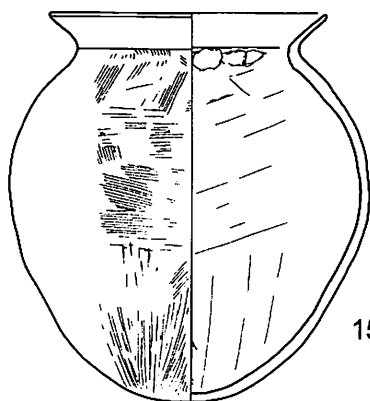
146 (P-406) から174 (P-405) は溝の南側に土層観察用に残していた部分の中から出土したもので、南断面として一括して取り扱った。



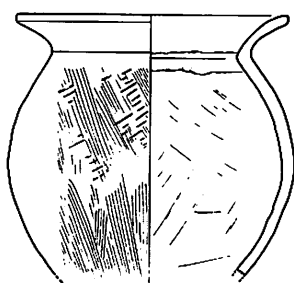
第39図 3号溝(南断面)出土遺物実測図



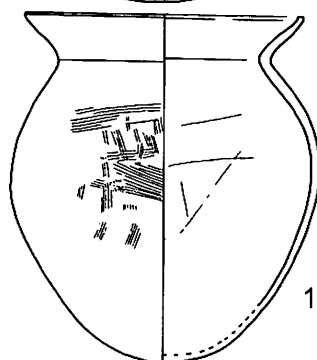
151



153

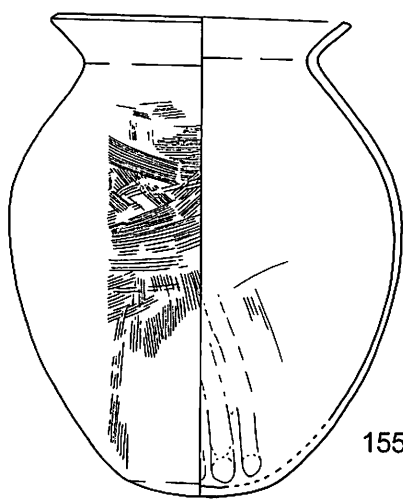


152

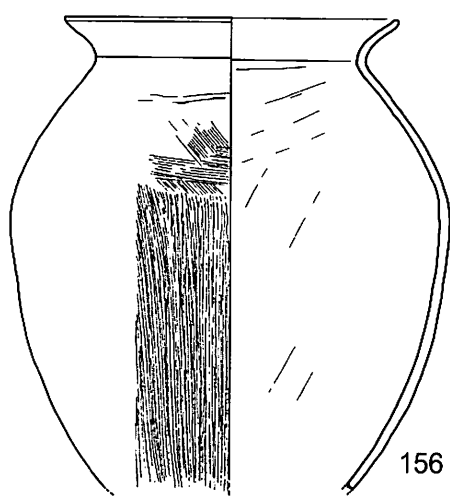


154

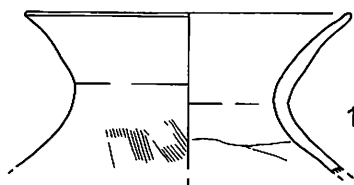
0 5 10cm



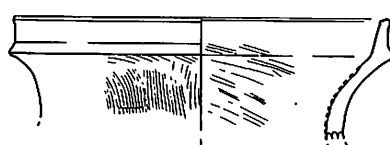
155



156

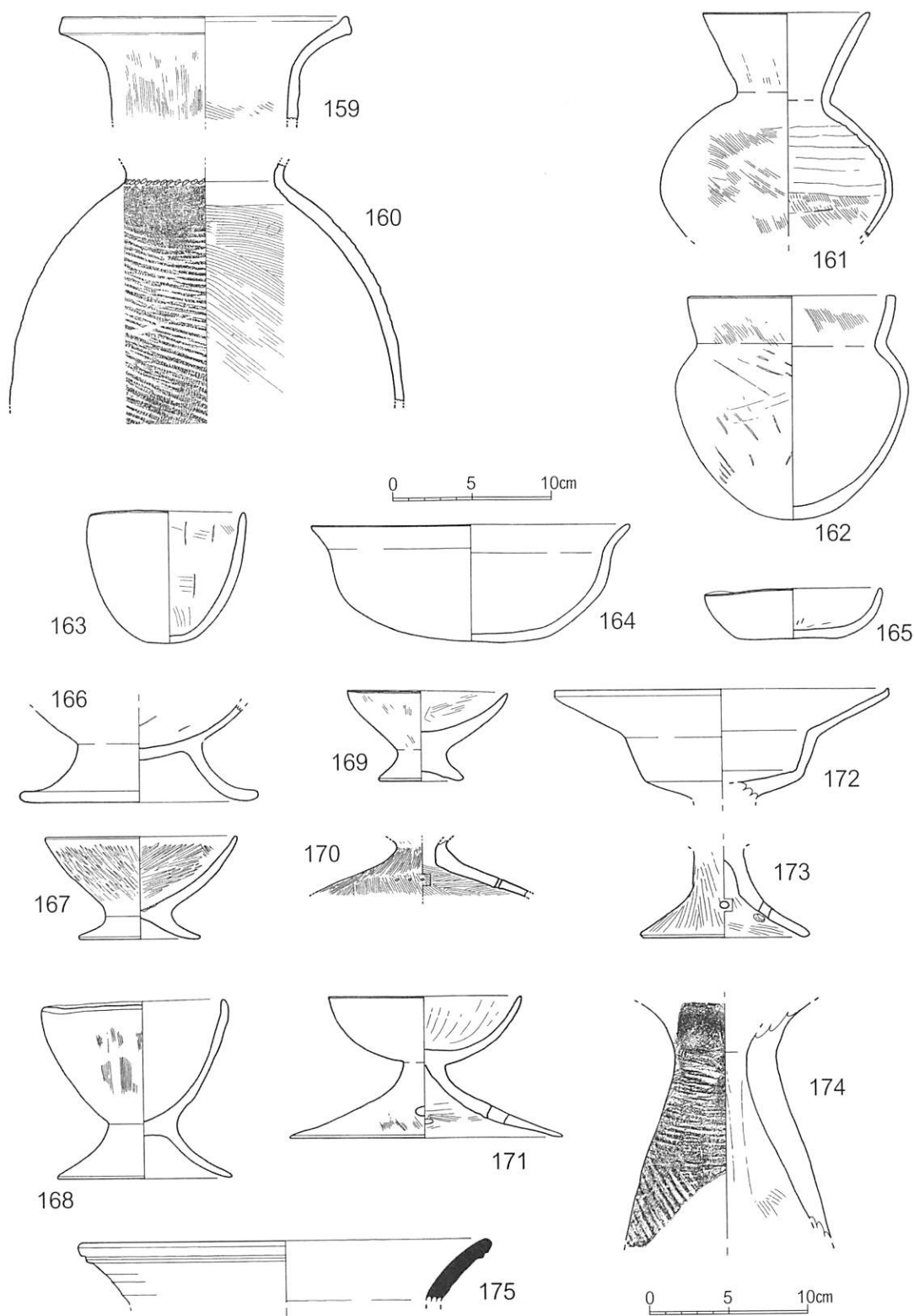


157

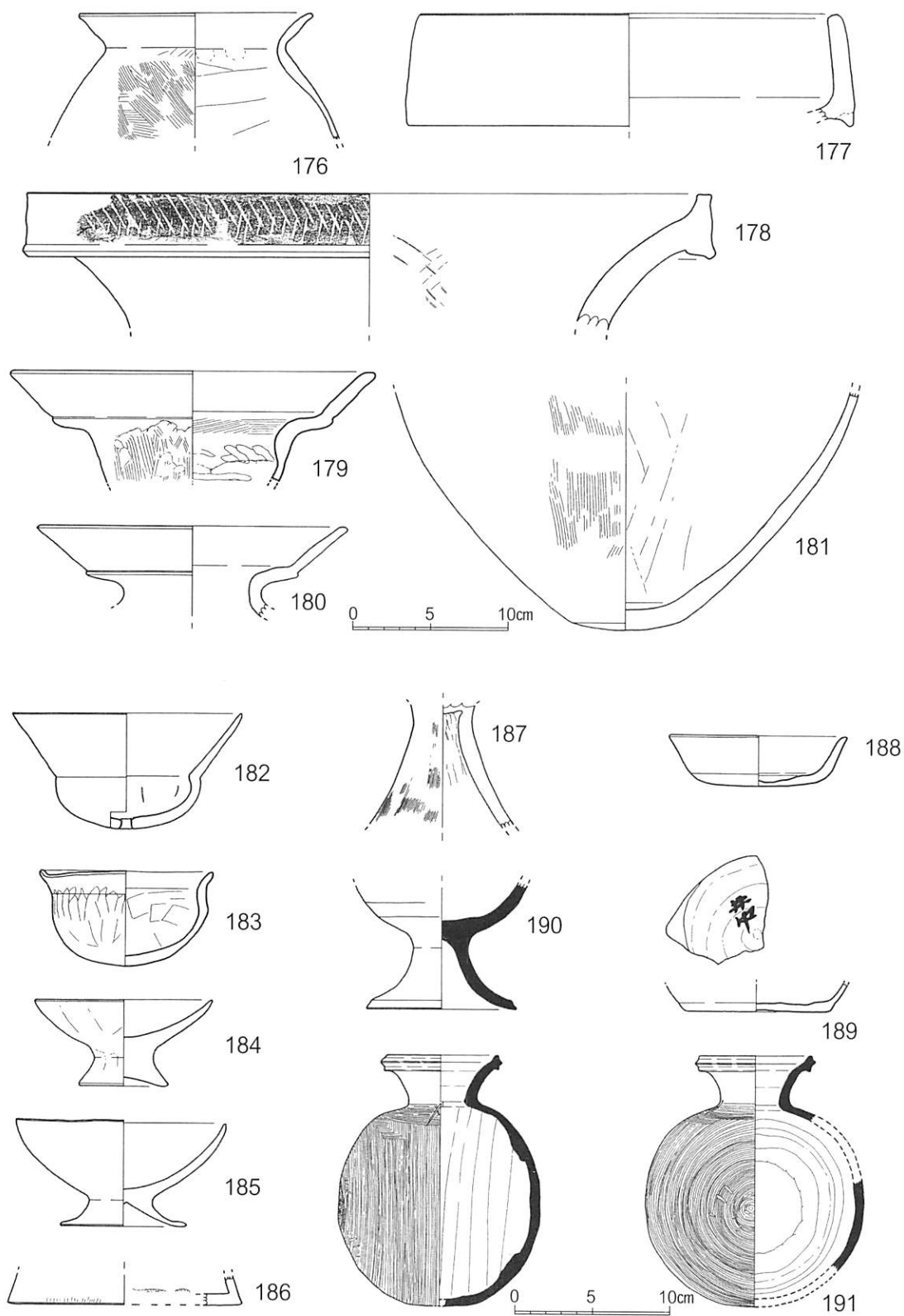


158

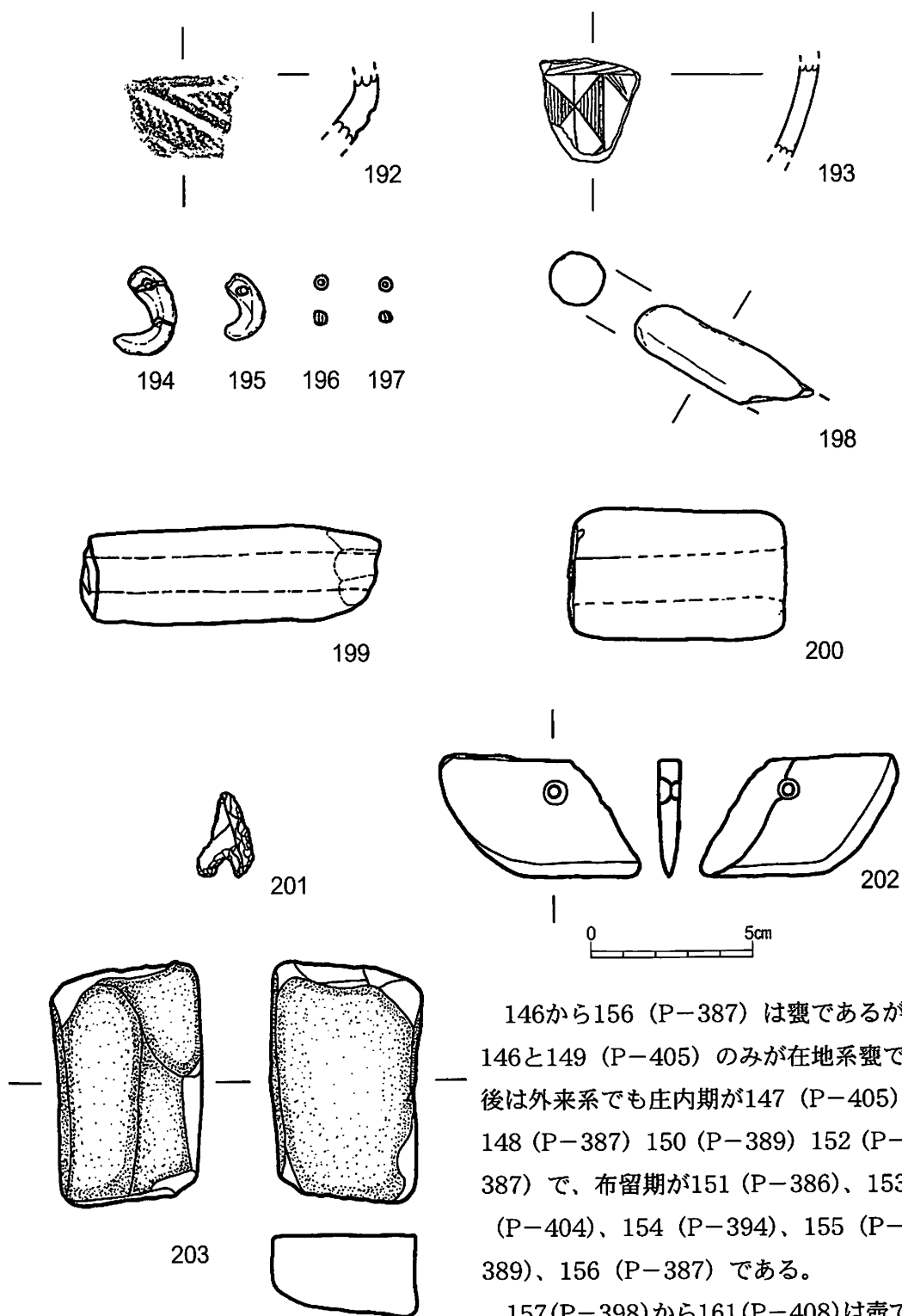
第40图 3号溝(南断面)出土遺物実測図



第41図 3号溝(南断面)出土遺物実測図



第42図 遺構に伴わない遺物実測図



第43図 遺構に伴わない遺物実測図

146から156 (P-387) は甕であるが、146と149 (P-405) のみが在地系甕で後は外来系でも庄内期が147 (P-405)、148 (P-387) 150 (P-389) 152 (P-387) で、布留期が151 (P-386)、153 (P-404)、154 (P-394)、155 (P-389)、156 (P-387) である。

157 (P-398) から161 (P-408) は壺である。162 (P-412) ～171 (P-388) は鉢である。172 (P-410) と173 (P-410)

は高杯である。174 (P-405) は在地系の器台で、175 (P-121) は須恵器の大甕の口縁部である。

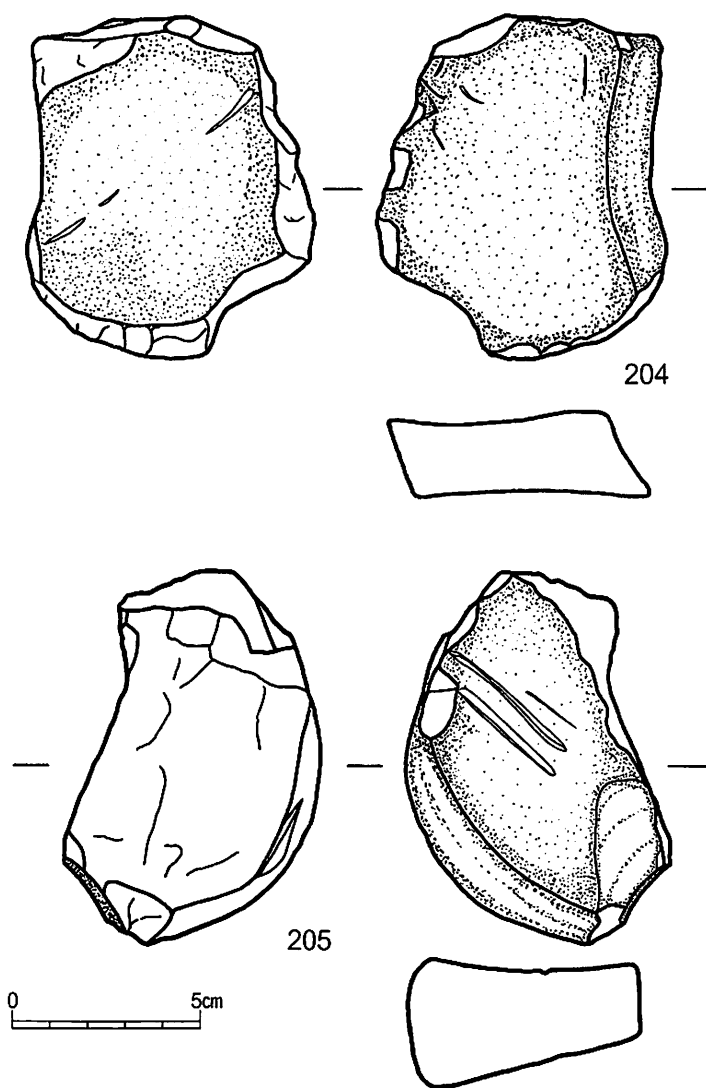
(15) 遺構に伴わない
遺物(図版9-1~5、
第42~44図)

176は外来系(布留期)の甕である。177~181 (P-144) は壺であるが多くの二重口縁部である。182は小型丸底壺で、183 (P-2) ~185は鉢である。186 (P-143) はジョッキ形土器で、187 (P-142) は高杯の脚である。188 (P-1) と189は土師の杯で189の底部には墨書で「井中」と記載されている。190は須恵器の台付き鉢、191は須恵器の提瓶である。肩にヘラ記号を記している。

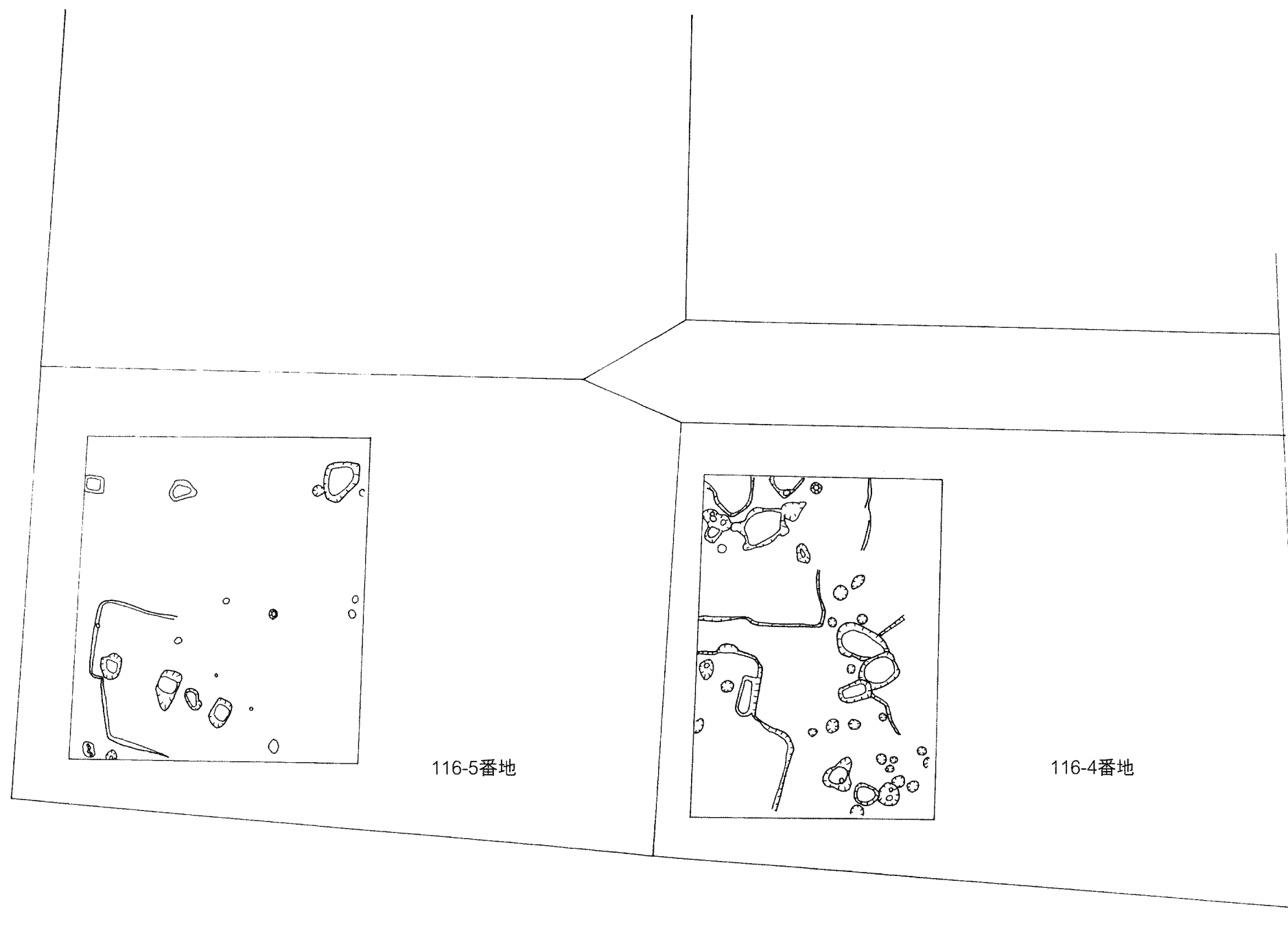
特殊な遺物

192は縄文土器で沈線とすり磨り消し縄文で施文している。193は鋭利な刃物による連続三角文で、これまでも連続三角文を施した小型の鉢が昭和56年の第3次調査で農協東側トレンチから出ており、昭和57年大道公民館建設に伴う第5次調査でも12号住居跡から鋸歯文を施した小型壺が出土しており共通した技法によるものである。

194、195は土製勾玉である。196、197はガラス小玉である。198は土製スプーンの柄である。199、200は土錘で、201~205は石器で、201は黒曜石の剥片石鏃である。202は石包丁の破片である。203~205は砥石である。

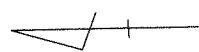


第44図 遺構に伴わない遺物実測図



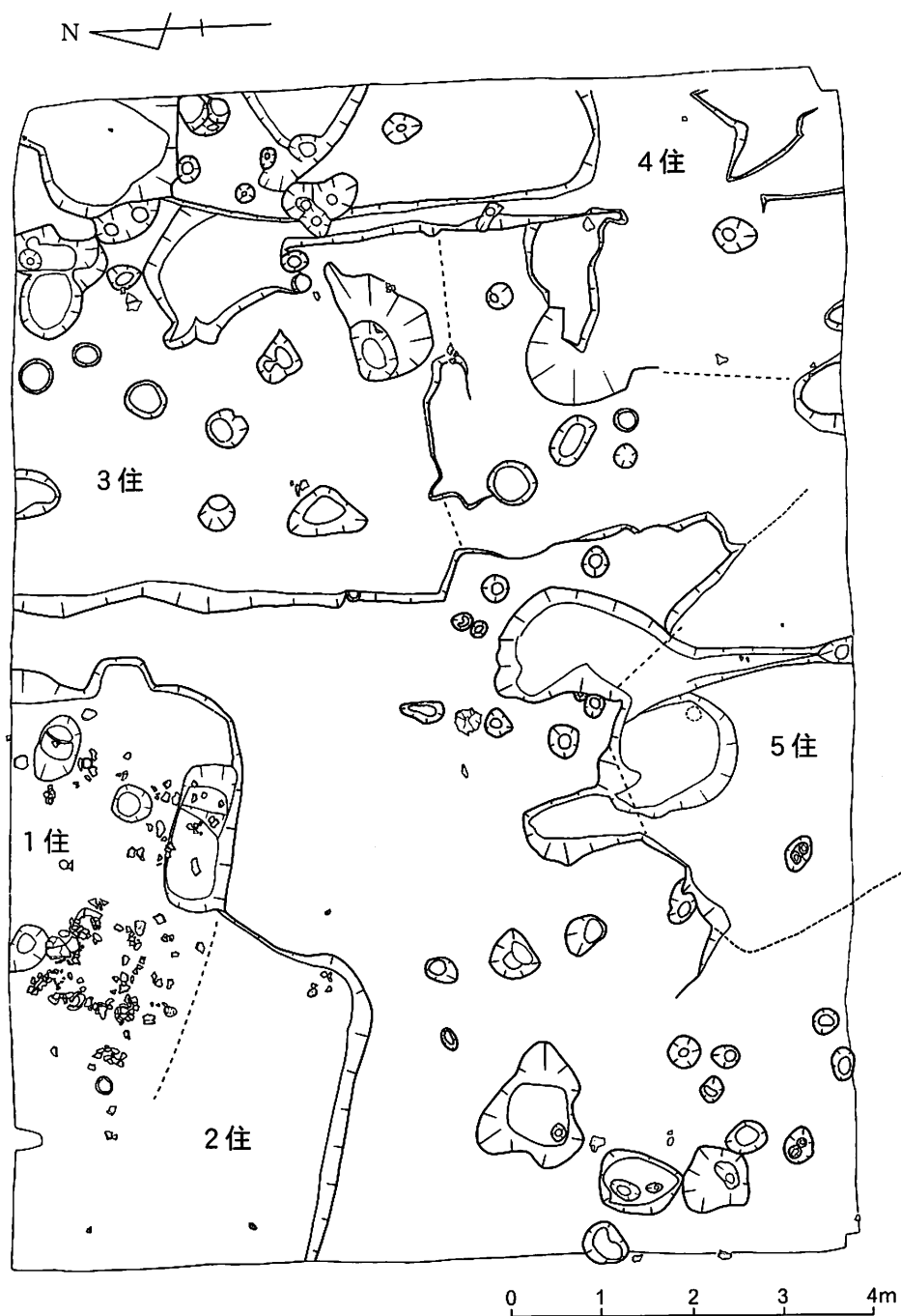
116-5番地

116-4番地

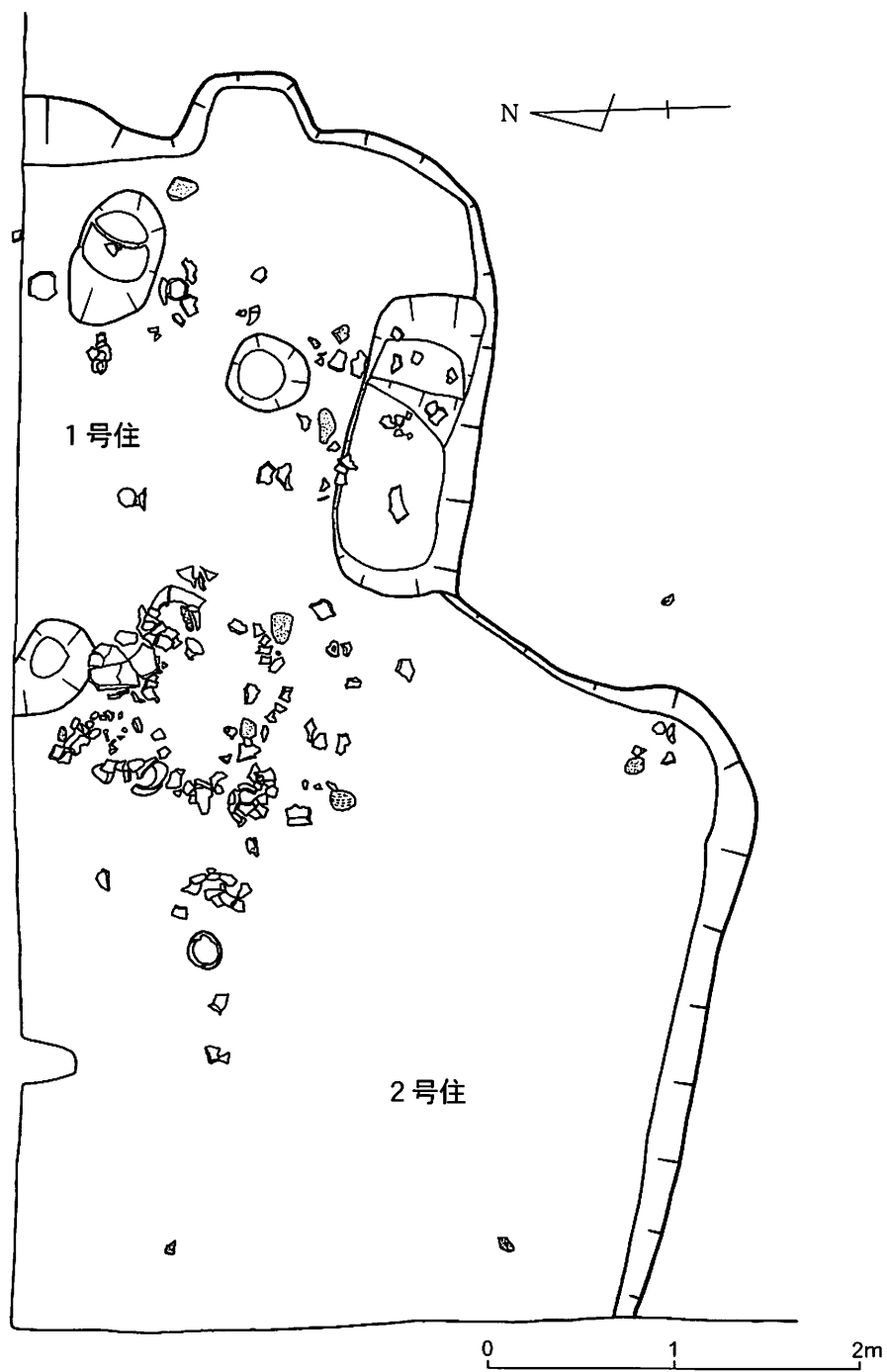


第45図 方保田東原遺跡116 -4,5番地調査区域測量図

0 5 10m



第46図 116-4番地 遺構配置図



第47図 1・2号住居跡実測図

IV 116-4番地の調査成果（小原家）

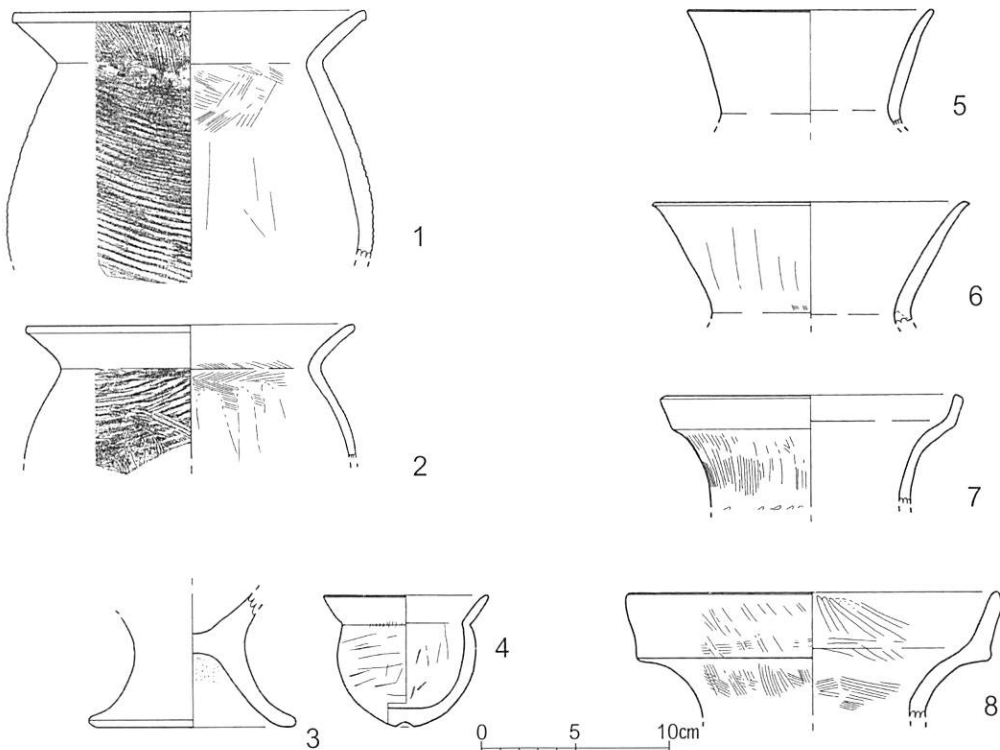
1 調査の概要（第46図）

ここは116-5番地と南北に隣接しており、住宅建設予定地のみを調査の対象とし、表土は重機によって除去して調査することとした。従って敷地の北側に偏った部分にトレンチを設定することとし東西約13m南北約9mの範囲で約120㎡を調査面積とした。なおトレンチの設定には機械測定を怠ったため変形した調査区となった。

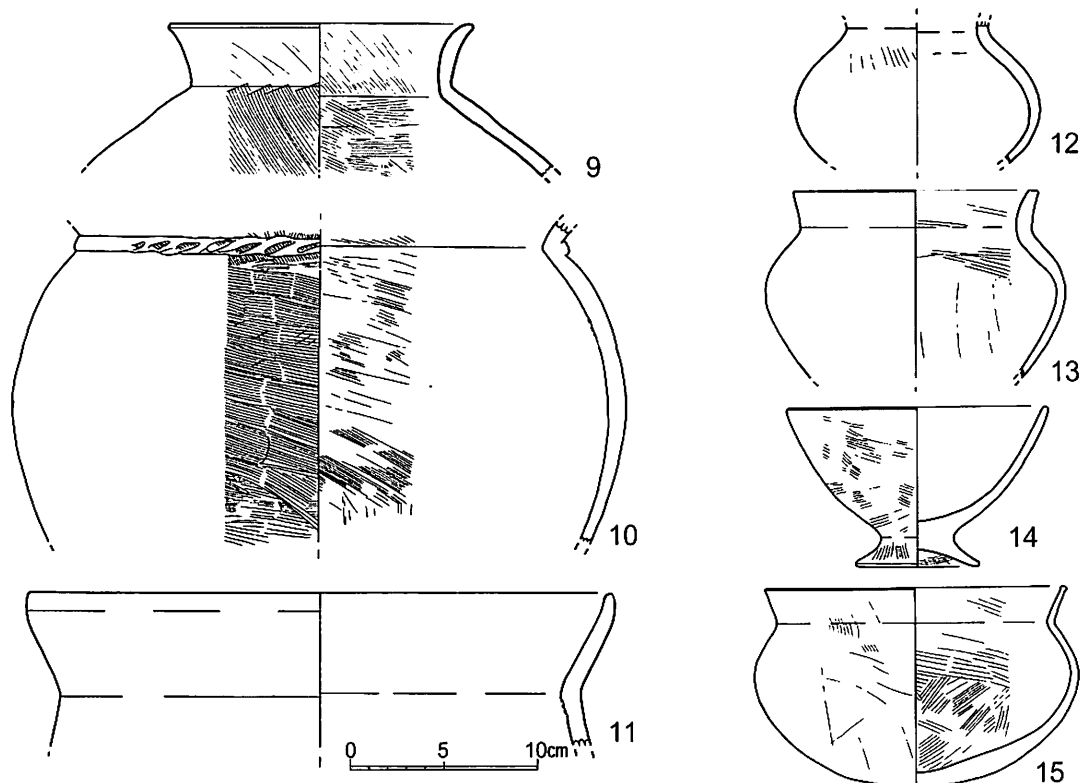
2 遺構と遺物

(1) 1号住居跡（図版5-1～2、第47図）

調査区の北西隅に2号住居跡と重なり合って検出された。残念ながら切り合い関係は確認できなかったが、遺物の散乱状況から判断すると2号住居跡には遺物が少なく、1号住居跡に多く散乱しているところから考えると2号住居跡が先行し、後から1号住居跡を築いたものと推察できる。



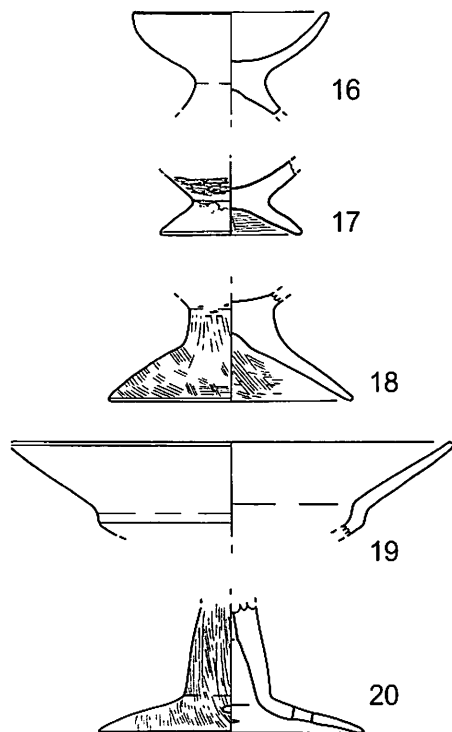
第48図 1号住居跡出土遺物実測図



第49図 1号住居跡出土遺物実測図

遺物 (図版9-6~7、第48~50図)

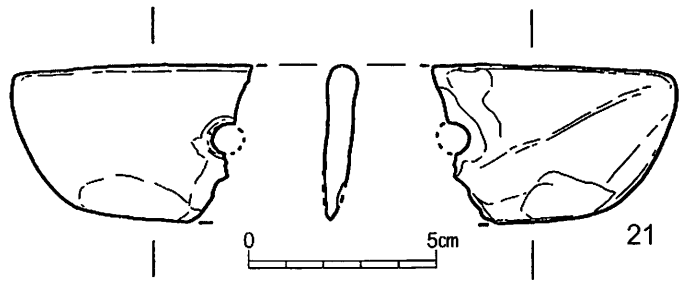
1 (P-12) と2 (P-19) は外来系 (庄内期) の甕で底部を欠いている。3 (P-20) は在地系甕の脚部である。4 (P-32) は完形の壺である、底部に小さな窪みがある。5 (P-14) ~9 (P-8) も壺である。口縁部の形態が5~6 (P-20) は直線的に開き、7 (P-31) ~8 (P-6、7) は二重口縁である。9は短い口縁部である。10 (P-19) は鉢である、頸部に凸帯を巡らし、刻み目を施している。11 (P-2、4、20) も鉢であるが特異な形態である。12 (P-21、33) は小形の壺の胴部である。13 (P-9) は鉢である、14 (P-57) も鉢で脚台を有している。15 (P-10) も鉢である。16 (P-34) ~18 (P-19) も脚台を有する鉢である。19 (P-14) と20 (P-29) は高杯である。21 (S-2) は石包丁の破片である。



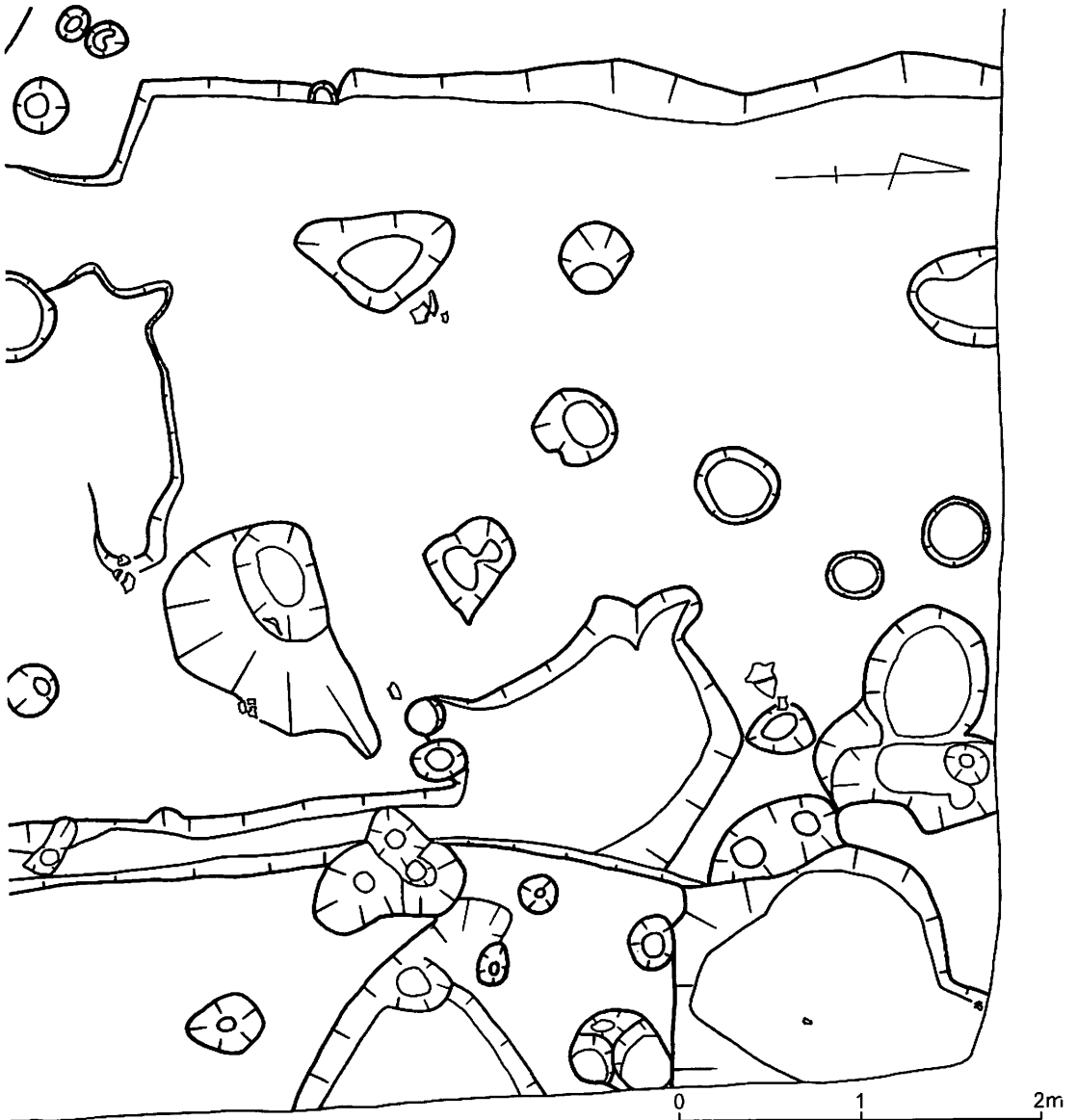
(2) 2号住居跡 (図版5-
2~3、第47図)

1号住居跡から切られてい
る様で南側の壁と東側の壁の
一部が残っていた。東壁は1
号住居跡の南壁と接しており、

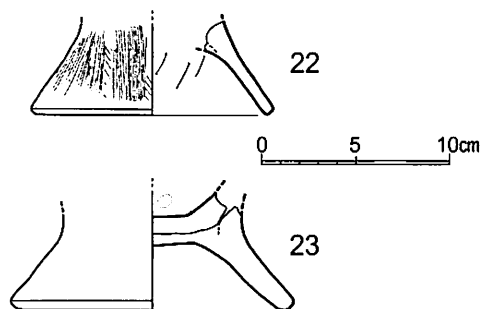
遺物の出土状況から1号住居跡から切られていると推察した。遺物は実測に耐えうる
ものは出土していない。



第50図 1号住居跡出土遺物実測図



第51図 3号住居跡実測図



第 52 図 3 号住居跡出土遺物実測図

(3) 3 号住居跡 (第51図)

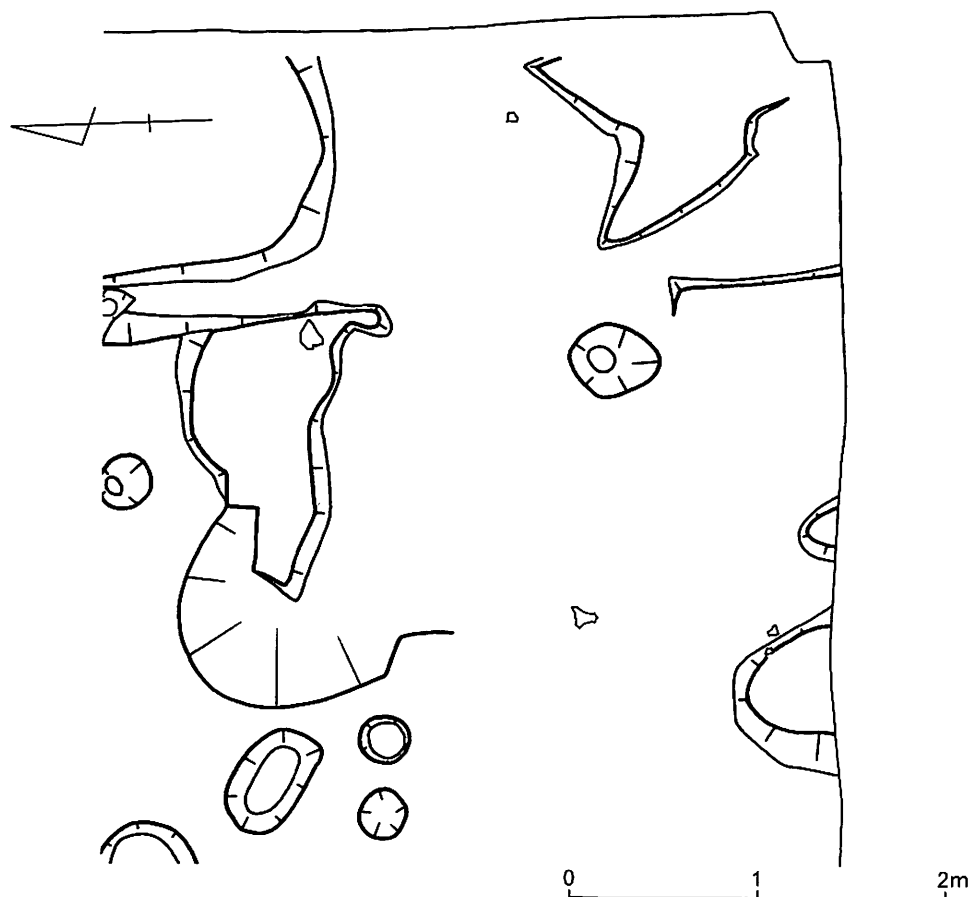
調査区北東部で確認された。西側の壁と南壁の一部が残る程度で攪乱が著しかった。遺物も殆んど出ておらず、僅かに 2 点が実測できた。

遺物 (第52図)

22 (P-47) と 23 (P-50) は在地系甕の脚台である。

(4) 4 号住居跡 (第53図)

攪乱がひどく壁面は明確に確認できなかったが、調査区の南東隅で床面を確認できた。遺物は殆んど出ておらず、僅かに 2 点の実測できた。

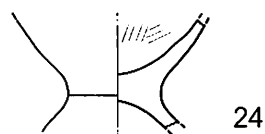


第53図 4 号住居跡実測図

遺物 (第54図)

24 (P-52) は在地系甕の脚台である。

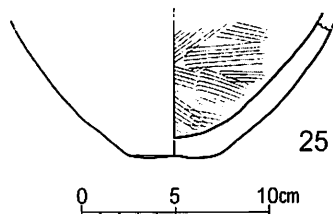
25 (P-51) は壺の底部である。



24

(5) 5号住居跡 (第55図)

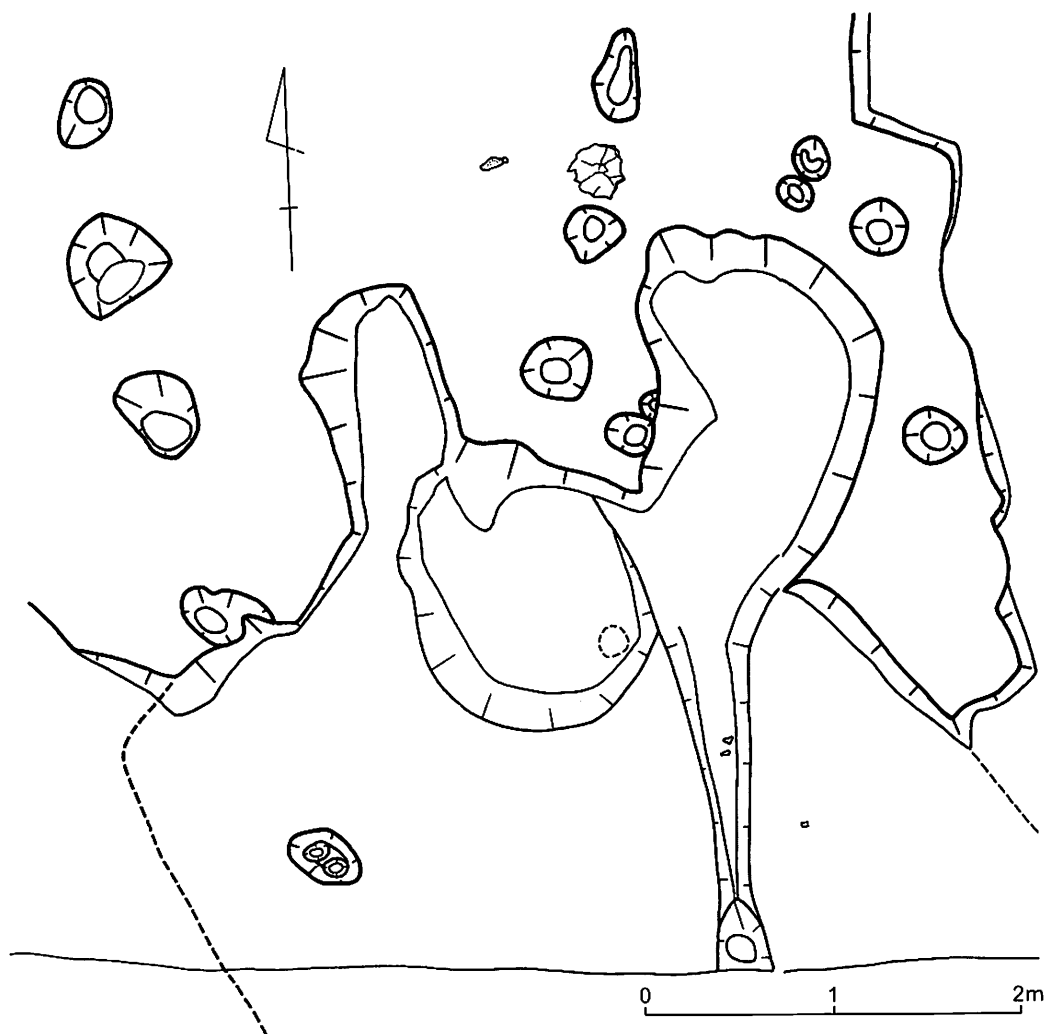
調査区の南中央で確認されたものであるが攪乱がひどく、一部の壁が残っていた程度であった。遺物は実測に耐えるものが出土しなかった。



25

0 5 10cm

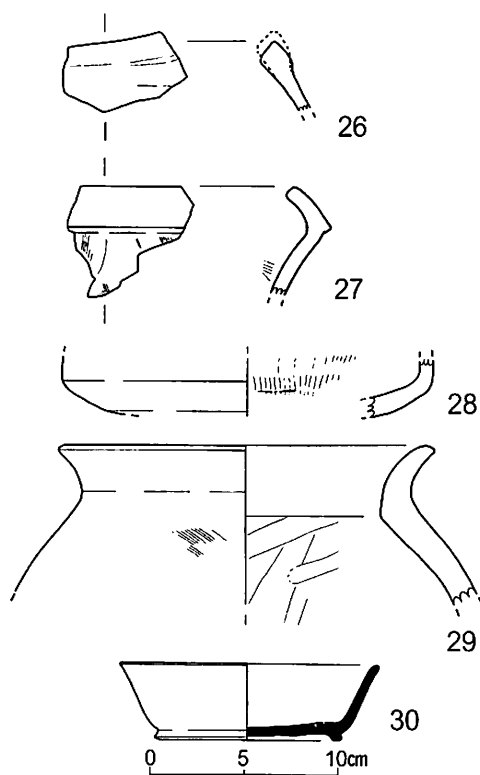
第54図 4号住居跡出土遺物実測図



第55図 5号住居跡実測図

(6) 遺構に伴わない遺物 (第56図)

26は胎土から縄文式土器であるが、内傾しつつ波状を呈した口縁であり、特異な形状である。27(P-41)は複合口縁壺の破片である。28も複合口縁壺の口縁部である。2個の円形貼付文と小さな櫛描き波状文配しており、昭和56年度大道小学校改築に伴う発掘調査で同様の資料が出土している。29は小型の台付き鉢の脚部である。30は土製品であるが剥離した痕跡もあり形状は断定できなかった。31はジョッキ形土器の取手である。32は土製勾玉である。33は土師器片であるが、形状は断定できなかった。外面には赤色顔料を塗っていた。34も土師器で甕である。口縁内部から外面には赤色顔料を塗っている。35は須恵器の高台付きの杯である。



第56図 遺構に伴わない遺物実測図

V 116-5番地の調査成果 (広瀬家)

1 調査の概要 (第57図)

116-4番地の北側に位置し、調査区域の北側に東西12.5m南北11mの範囲で約137.5㎡を調査面積とした。なおトレンチの設定には機械測定を怠ったため変形した調査区となった。さらにこの地は宅地として整地した際削平を受けており重ねて表土が浅かったため遺構の残りが少なかった。

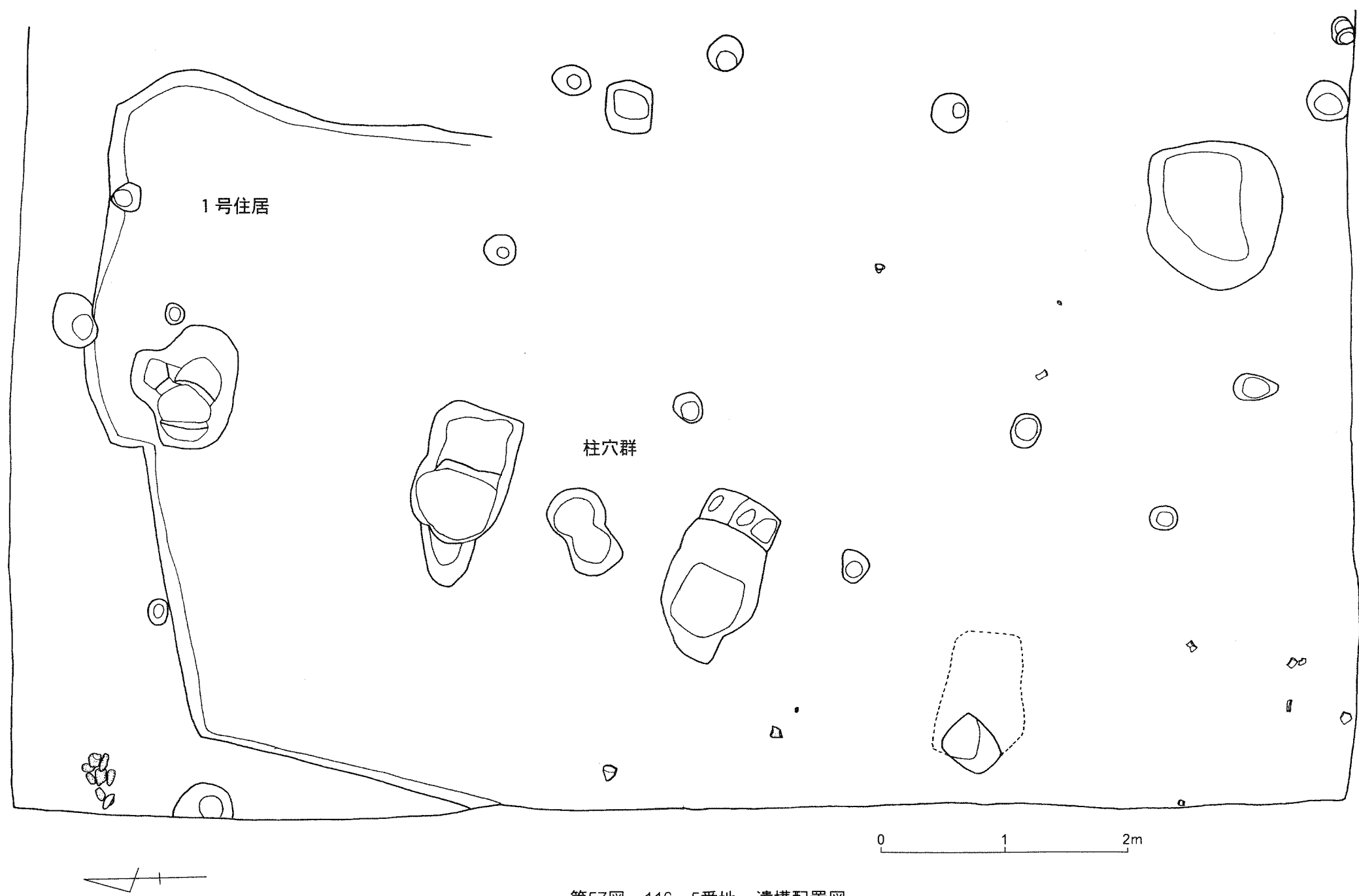
2 遺構と遺物

(1) 1号住居跡 (第57図)

調査区の北西部で確認されたもので、長さ5mの北側の壁と東西の壁の一部が2～3m程度残っていた。遺物は実測に耐えうるものは見られなかった。

(2) 柱穴群 (第57図)

1号住居跡の中に3個の大型柱穴が北東から南西方向に一列に並んでいる。柱穴の

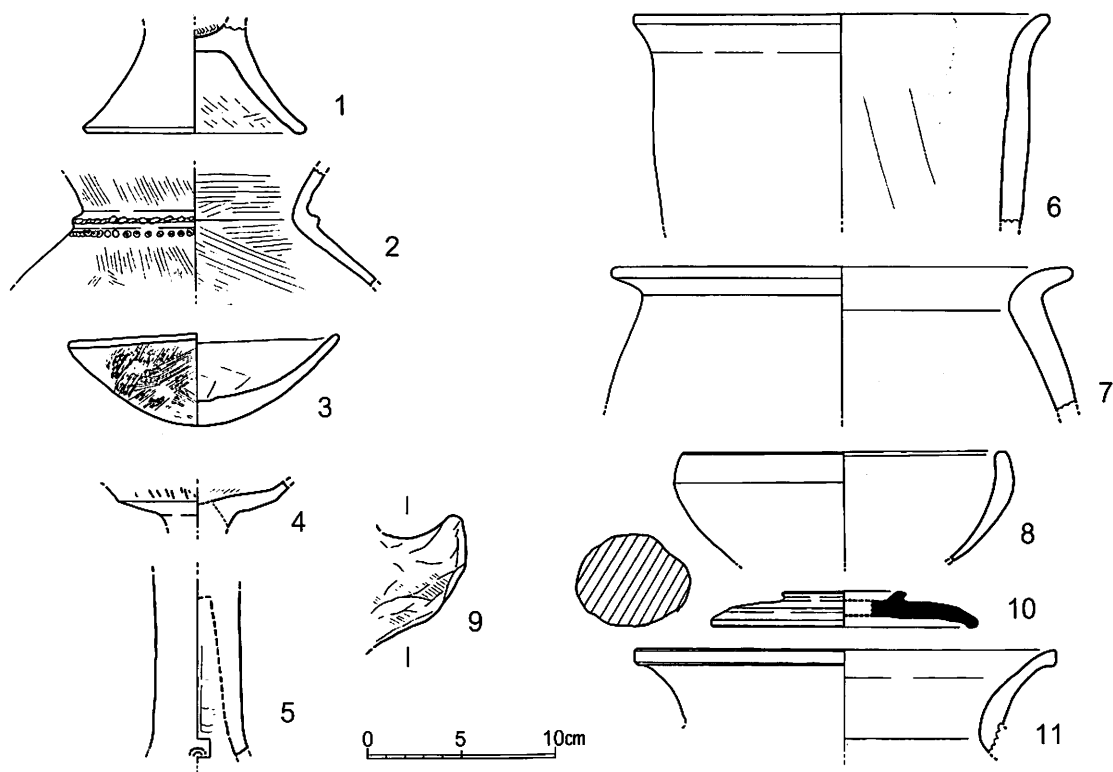


第57図 116-5番地 遺構配置図

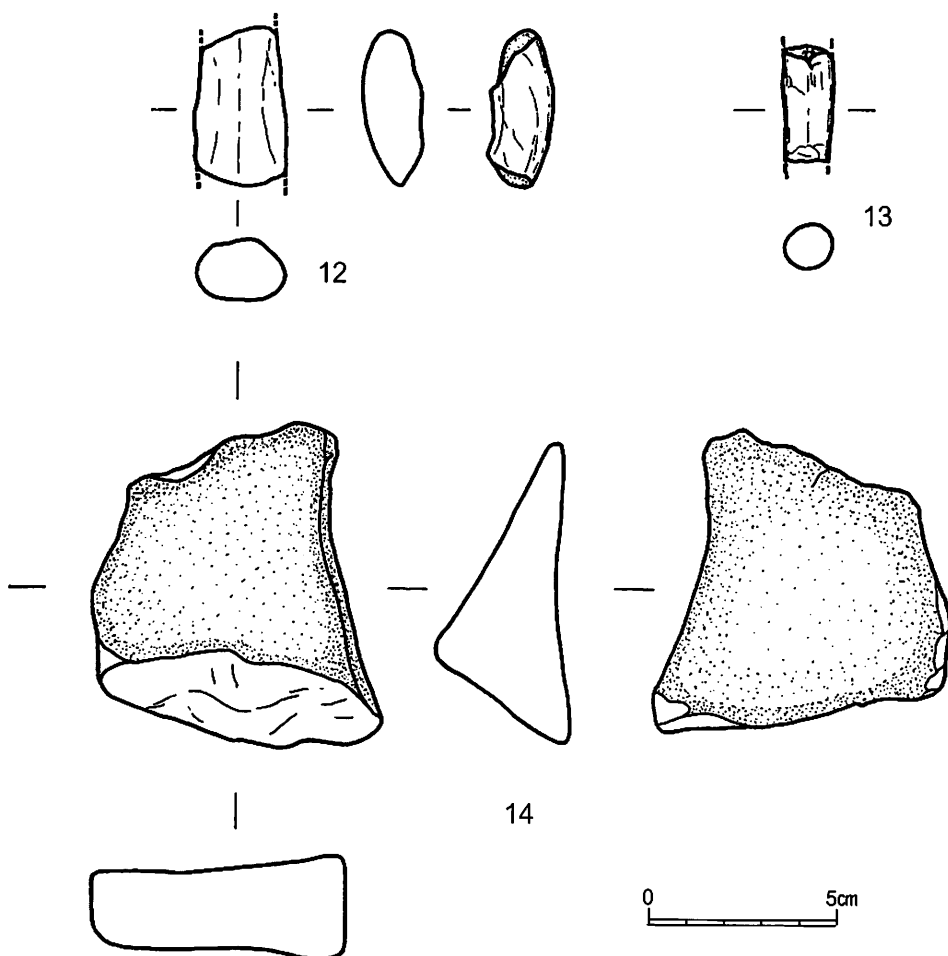
間は2.4m、2.2mを測るが、他に連続する柱穴は検出できなかった。しかし今後は機会があれば調査区外に同様の柱穴群を追求したいものである。

(3) 遺構に伴わない遺物 (図版9-8～9、第58・59図)

1 (P-8) は在地系甕の脚台である。2 (P-7) は壺の頸部である。3 (P-10) は完形の鉢で、4 (P-4) と5 (P-1) は高杯である。6 と7 は土師の甕で8 は土師の鉢である。9 は土師の牛角取っ手である。10 は須恵器の杯蓋で11も須恵器の甕の口縁部である。12 は手捏の取っ手で、13 も取っ手であろう。14 (S-1) は砥石でかなり使い込んである。



第58図 遺構に伴わない遺物実測図



第59図 遺構に伴わない遺物実測図

VI まとめ

当該年度では個人住宅建設に伴った発掘調査で3地点を対象としたが、32-2番地については台地を南北に断ち切るような溝が検出され、昭和57年度に調査した大道公民館に於いて検出された3号溝と続く可能性を秘めた溝であることが判明した。¹時期的には庄内期を中心としていたが、畿内系の遺物を多く出土し、稀に山陰系特に出雲地方の特色を持った壺が出土したことは当時の交易の広がりを考えるには絶好の資料と言えるものである。加えて銅鏃が出土したが、東隣の32-1番地においても昭和55年鹿本高校の調査で銅鏃が1点出土しており²集中した傾向を示している。

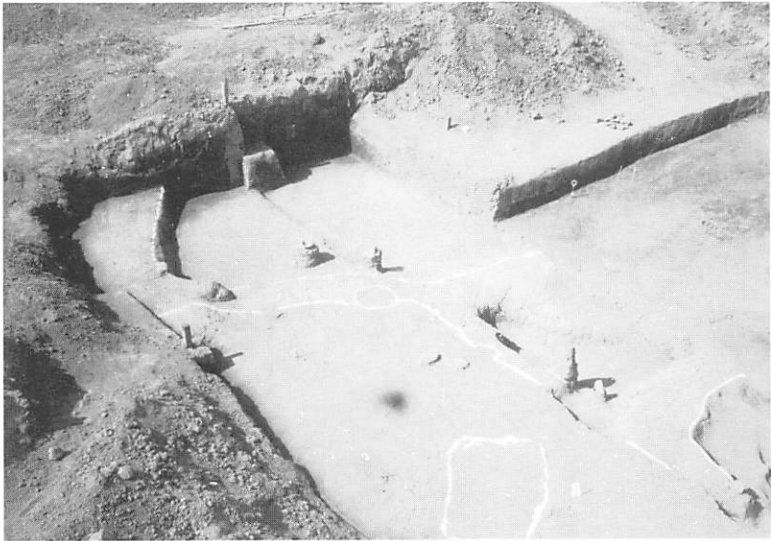
116-4、5番地ではすでに上面を削平され遺構面が浅く攪乱が著しかったが、大型の掘っ立て柱が見られたことから今後の調査で追求したいものである。

文献 註1. 方保田東原遺跡(2) 山鹿市教育委員会 1984

註2. 方保田東原遺跡 山鹿市教育委員会 1982

版 图

32-2番地



1号住居



4号住居



4号住居
発掘状況



1

3号住居



2

3号住居
実測風景



3

1号土壇
銅鏃出土
状況

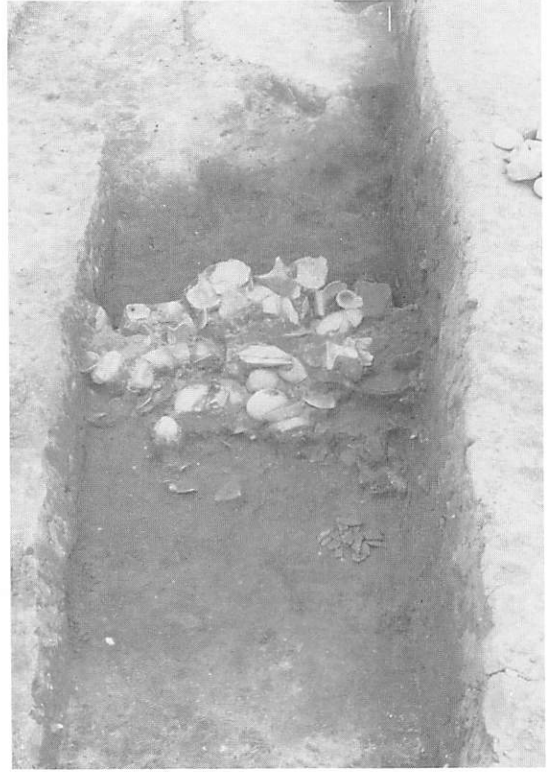


1



2

作業風景



3

遺物出土状況

3号溝



1

3号溝
遺物出土
状況



2

3号溝完掘
北より



3

3号溝完掘
南より

116-4番地



1・2号住居



1・2号住居



2号住居

116-5番地

1



1号住居

2



柱穴群

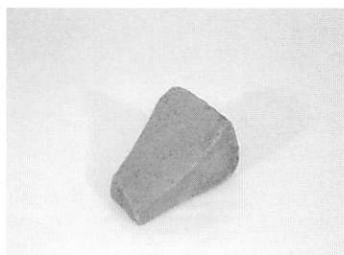
3



集石遺構

遺物写真

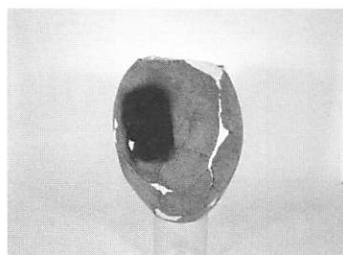
32-2番地の遺物



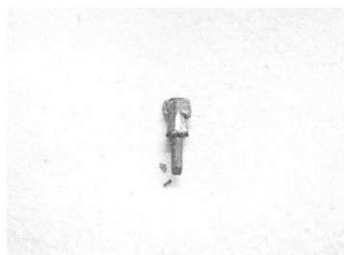
1 2号住居 (3)



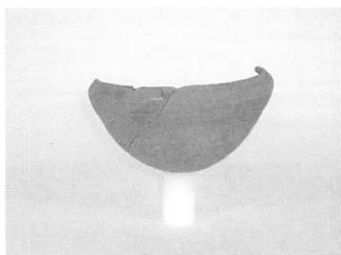
2 3号住居 (6)



3 8号住居 (12)



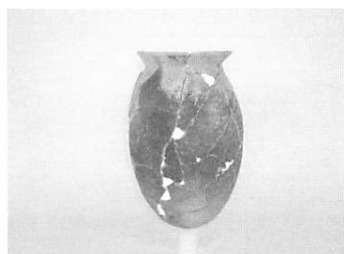
4 1号土壙 (14)



5 2号溝 (24)



6 3号溝 (47)



7 3号溝 (48)



8 3号溝 (50)



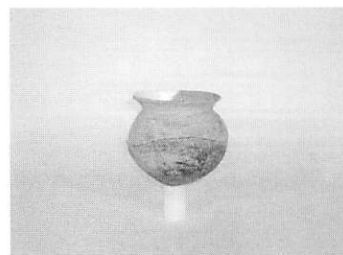
9 3号溝 (51)



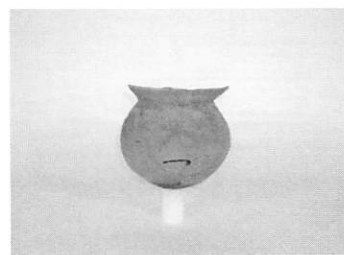
10 3号溝 (54)



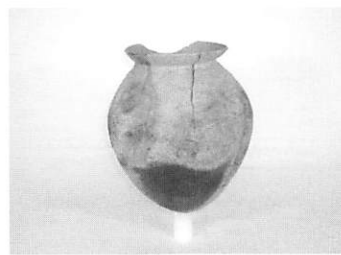
11 3号溝 (55)



12 3号溝 (57)



13 3号溝 (58)



14 3号溝 (60)



15 3号溝 (61)

3号沟出土遗物



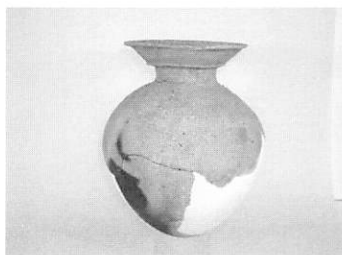
1 (66)



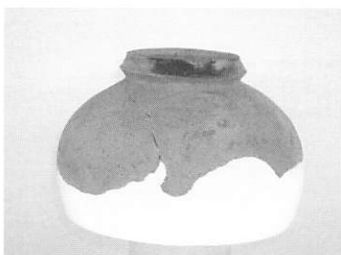
2 (67)



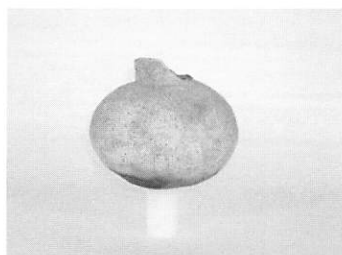
3 (72)



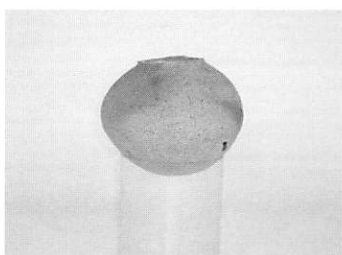
4 (83)



5 (89)



6 (90)



7 (91)



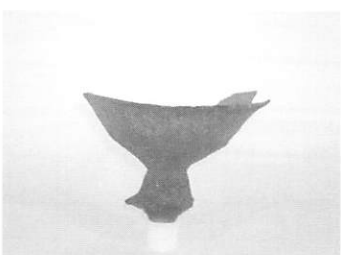
8 (106)



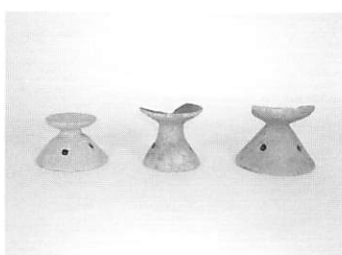
9 (112)



10 (131)



11 (132)



12 (136·135·141)



13 (147)

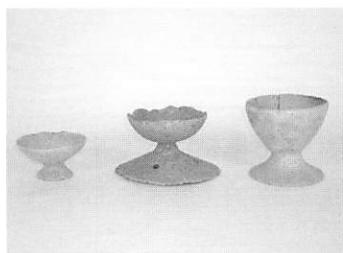


14 (150)



15 (161)

遺構に伴わない遺物



1 (169・171・168)



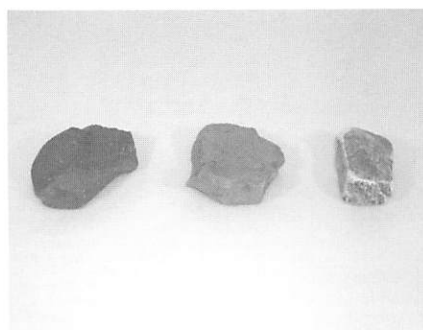
2 (194)



3 (198・199)



4 (200)



5 (203・204・205)

116-4番地出土遺物

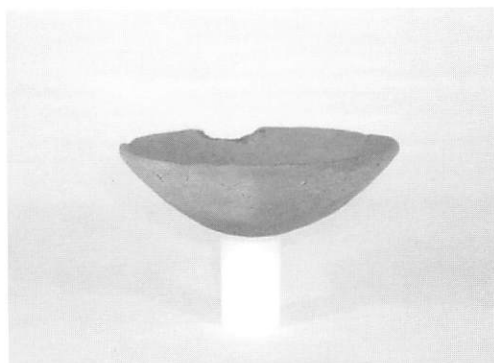


6 1号住居 (4)

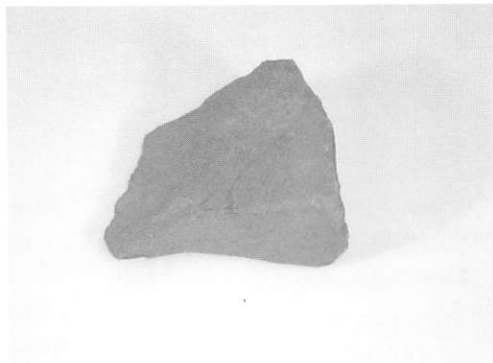


7 1号住居 (15)

116-5番地出土遺物



8 (3)



9 (14)

山鹿市立博物館調査報告書 第12集

方保田東原遺跡

平成4年3月31日

編集 山 鹿 市 立 博 物 館
〒861-0541 熊本県山鹿市大字鍋田2085

発行 山 鹿 市 教 育 委 員 会
〒861-0501 熊本県山鹿市大字山鹿1026-2

印刷 株式会社 ミズキオペレーション
〒861-0532 熊本県山鹿市鹿校通二丁目3-13

『方保田東原遺跡』－個人住宅建設に伴う調査－

山鹿市文化財調査報告書 第12集 熊本県山鹿市教育委員会1992年

頁	行 図番	誤	正
10	第4 図	7住	8住
10	第4 図	8住	7住
21	2 行	1号住居の南に	3号住居の南に
27	13 行	47(P-348)は外来系甕で	47(P-250)は外来系甕で
27	13 行	48(P-250)は在地系甕で	48(P-348)は在地系甕で
35	第37 図 90	図番号90(図の上から2段目中央)	(図番号を)99
48	12 行	14(P-57)も鉢で脚台を有している。	14(P-10)も鉢で脚台を有している。
48	13 行	15(P-10)も鉢である。	15(P-57)も鉢である。
52	4行	28も複合口縁壺の～断定できなかった。	削除
52	12 行	外面には赤色顔料を塗っていた。	28は土師器の坏か。外面には赤色顔料が塗布される。
52	13 行	34も土師器で甕である。	29も土師器で甕である。
52	15 行	35は須恵器の	30は須恵器の

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第12集 市内遺跡確認調査 方保田東原遺跡—個人住宅建設に伴う調査—』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市立博物館調査報告第12集 市内遺跡確認調査 方保田東原遺跡
—個人住宅建設に伴う調査—

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 7 月 4 日